

阿武隈川上流河川改修事業  
御代田地区遺跡調査報告1

徳定A・B遺跡

2023年

福島県教育委員会  
公益財團法人福島県文化振興財團  
国土交通省東北整備局福島河川国道事務所

阿武隈川上流河川改修事業  
御代田地区遺跡調査報告 1

とくさだ  
徳定 A・B 遺跡



## 緒 言

- 1 本書は、令和2年度に実施した阿武隈川上流河川改修事業御代田地区にかかる埋蔵文化財の発掘調査報告である。
- 2 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。  
徳定A・B遺跡 福島県郡山市田村町御代田字徳定前・石仏  
埋蔵文化財番号 7203200562
- 3 本事業は、公益財団法人福島県文化振興財団が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、福島県教育委員会と協定を締結して実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。
- 4 土国交通省東北地方整備局福島河川国道事務所は、本発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。  
復興事業担当課長 藤谷 誠 専門文化財主査 吉野滋夫 文化財主事 神林幸太朗
- 6 本書の執筆は担当職員が行い、文責は文末に示した。
- 7 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載した。  
樹種同定：株式会社吉田生物研究所、骨同定分析：パリノ・サーヴェイ株式会社、製鉄関連遺物化学分析：株式会社古環境研究所
- 8 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。  
郡山市文化スポーツ部文化振興課、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

## 用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は座標北を示す。方位記号の無いものは、図の真上を座標北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「 $\pi\pi$ 」、緩傾斜部は「 $\pi$ 」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のlと算用数字で表記した。  
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…l 1・l 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 土 色 土層注記に使用した土色は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1999)に基づいている。
- (7) 網 点 網点は焼土面を、それ以外は挿図中に用例を示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 遺物断面 粘土積み上げ痕は一点鎖線、須恵器・鉄製品の断面は黒塗りとした。
- (3) 青磁・白磁断面 軸の厚さを示した。
- (4) 網 点 ■は黒色処理を、それ以外は挿図中に用例を示した。
- (5) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。  
(例) 図1の2番の遺物…図1-2  
遺物写真の中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。  
(例) 1-2…図1-2
- (6) 遺物計測値 ( ) 内の数値は推定値、[ ]内の数値は遺存値を示す。  
少数第2位以下は四捨五入とした。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

- 郡山市…C Y 德定A・B遺跡…T S・A・B
- 竪穴住居跡…S I 掘立柱建物跡…S B 土坑…S K 井戸跡…S E
- 溝跡…S D 遺物包含層…S H 柱穴・小穴…P

4 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、第3章末に収めた。

# 目 次

## 第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査事業の経緯	1
第2節 遺跡の位置と地理的環境	3
第3節 歴史的環境	5
第4節 調査経過と調査方法	10

## 第2章 遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	12		
第2節 堅穴住居跡	16		
1号住居跡(16)	2号住居跡(19)	3号住居跡(19)	4号住居跡(22)
5号住居跡(22)	6号住居跡(26)	7号住居跡(26)	8号住居跡(28)
第3節 掘立柱建物跡	32		
1号建物跡(32)	2号建物跡(32)	3号建物跡(34)	4号建物跡(36)
5号建物跡(36)	6号建物跡(39)		
第4節 土 坑	39		
1号土坑(40)	2号土坑(40)	6号土坑(40)	7号土坑(44)
8号土坑(44)	12号土坑(47)	14号土坑(47)	15号土坑(49)
16号土坑(49)	20号土坑(49)	24号土坑(49)	25号土坑(52)
26号土坑(52)	27号土坑(52)	33号土坑(52)	34号土坑(53)
39号土坑(53)	47号土坑(57)	49号土坑(57)	54号土坑(57)
72号土坑(57)	73号土坑(60)	82号土坑(60)	91号土坑(60)
98号土坑(65)	101号土坑(65)	103号土坑(65)	111号土坑(65)
第5節 井 戸 跡	71		
1号井戸跡(71)	2号井戸跡(91)		
第6節 溝 跡	91		
1号溝跡(91)	2号溝跡(93)	3号溝跡(93)	4号溝跡(99)
5号溝跡(101)	6号溝跡(101)	8号溝跡(103)	9号溝跡(103)
10号溝跡(104)	22号溝跡(104)	11・14・16号溝跡(104)	
17号溝跡(106)	18号溝跡(106)	12号溝跡(108)	13・23号溝跡(109)
15号溝跡(109)	19~21号溝跡(111)		
第7節 祭 祀 跡	114		
1号祭祀跡(114)	2号祭祀跡(119)	3号祭祀跡(121)	
第8節 小 穴	133		
第9節 その他の遺構と遺物	154		
1号烟跡(154)	2号烟跡(155)	第1遺物包含層(158)	第2遺物包含層(158)
遺構外出土遺物(160)			

## 序 文

阿武隈川流域では、令和元年東日本台風(台風第19号)に伴う大規模な洪水により被害が多数発生したため、国・県・関係市町村が連携して「阿武隈川緊急治水対策プロジェクト」が策定されました。これに伴い、福島県教育委員会では、同事業計画地内について埋蔵文化財の保存のための協議を行い、現状での保存が困難なものについては、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、令和2年度に発掘調査を実施した、郡山市田村町御代田地内に所在する徳定A・B遺跡についての調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、古墳時代の祭祀跡や、中世の居住域が確認されました。特に今回の調査では、鎌倉時代の陶磁器や鉄製品、銭貨が出土しており、周辺の遺跡と併せて当地が交通の要衝の地であったことがうかがえます。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解を促進するものです。本報告書が、文化財に対する県民の皆様の理解を深めるとともに、郷土の歴史を解明するための一助となれば幸いです。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力を頂いた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、郡山市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和5年3月

福島県教育委員会

教育長 大沼博文

### 第3章 まとめ

第1節 遺物	162
古墳時代の土器(162)   かわらけ・陶磁器(164)   その他の遺物(166)	
第2節 遺構	166
祭祀跡(166)   中世の遺構(167)   遺構の変遷(167)	
第3節 遺跡の性格	169

### 付 章 自然科学分析

第1節 徳定A・B遺跡の出土骨について	171
第2節 徳定A・B遺跡製鉄関連遺物化学分析	176
第3節 福島県徳定A・B遺跡出土木材の樹種調査	182

### 挿図・表・写真目次

#### [挿図]

図1 御代田地区位置図	1	図25 7~10号土坑	46
図2 工事範囲図	2	図26 11~14号土坑	48
図3 地形分類図	4	図27 15~17・22・24号土坑	50
図4 周辺の遺跡位置図	6	図28 18~21・23・40号土坑	51
図5 遺構配置図(1)	13	図29 26号土坑	53
図6 遺構配置図(2)	14	図30 25・27・30~32・38号土坑	54
図7 基本土層	15	図31 33~37号土坑	55
図8 1号住居跡	17	図32 39~41~48号土坑	56
図9 1号住居跡・出土遺物	18	図33 49~51・54~56・61・62号土坑	58
図10 2号住居跡	20	図34 63~68・76号土坑	59
図11 3号住居跡・出土遺物	21	図35 69~73号土坑	61
図12 4号住居跡・出土遺物	23	図36 74・75・77~81・84号土坑	62
図13 5号住居跡・出土遺物	24	図37 82・83・85~88号土坑	63
図14 5号住居跡出土遺物	25	図38 89~95号土坑	64
図15 6・7号住居跡・出土遺物	27	図39 96~100・102~104号土坑	66
図16 8号住居跡・出土遺物	29	図40 101・105~110号土坑	67
図17 9号住居跡	30	図41 111・112号土坑、土坑出土遺物	68
図18 9号住居跡出土遺物	31	図42 土坑出土遺物(1)	69
図19 1・2号建物跡	33	図43 土坑出土遺物(2)	70
図20 3号建物跡・出土遺物	35	図44 1号井戸跡	72
図21 4号建物跡	37	図45 1号井戸跡出土遺物(1)	75
図22 5・6号建物跡・5号建物跡出土遺物	38	図46 1号井戸跡出土遺物(2)	76
図23 1号土坑	44	図47 1号井戸跡出土遺物(3)	77
図24 2~6号土坑	45	図48 1号井戸跡出土遺物(4)	78



図49	1号井戸跡出土遺物(5) .....	79	図84	3号祭祀跡出土遺物(1) .....	126
図50	1号井戸跡出土遺物(6) .....	80	図85	3号祭祀跡出土遺物(2) .....	127
図51	1号井戸跡出土遺物(7) .....	81	図86	3号祭祀跡出土遺物(3) .....	128
図52	1号井戸跡出土遺物(8) .....	82	図87	3号祭祀跡出土遺物(4) .....	129
図51	1号井戸跡出土遺物(7) .....	81	図88	3号祭祀跡出土遺物(5) .....	130
図52	1号井戸跡出土遺物(8) .....	82	図89	3号祭祀跡出土遺物(6) .....	131
図53	1号井戸跡出土遺物(9) .....	83	図90	3号祭祀跡出土遺物(7) .....	132
図54	1号井戸跡出土遺物(10) .....	84	図91	小穴分割図 .....	134
図55	1号井戸跡出土遺物(11) .....	85	図92	小穴(1) .....	145
図56	1号井戸跡出土遺物(12) .....	86	図93	小穴(2) .....	146
図57	1号井戸跡出土遺物(13) .....	87	図94	小穴(3) .....	147
図58	1号井戸跡出土遺物(14) .....	88	図95	小穴(4) .....	148
図59	1号井戸跡出土遺物(15) .....	89	図96	小穴(5) .....	149
図60	1号井戸跡出土遺物(16) .....	90	図97	小穴(6) .....	150
図61	2号井戸跡・出土遺物 .....	92	図98	小穴(7) .....	151
図62	1・2・6号溝跡、2号溝跡出土遺物 .....	94	図99	小穴(8) .....	152
図63	3号溝跡 .....	96	図100	小穴出土遺物(1) .....	153
図64	3号溝跡出土遺物(1) .....	97	図101	小穴出土遺物(2) .....	154
図65	3号溝跡出土遺物(2) .....	98	図102	1号烟跡・出土遺物 .....	156
図66	3号溝跡出土遺物(3) .....	99	図103	2号烟跡 .....	157
図67	4号溝跡・古銭出土状況 .....	100	図104	第1遺物包含層土器出土点数 .....	158
図68	4号溝跡出土遺物(1) .....	102	図105	第1・2遺物包含層出土遺物 .....	159
図69	4号溝跡出土遺物(2) .....	103	図106	遺物外土器器出土点数 .....	160
図70	5・8~10・22号溝跡 .....	105	図107	遺構外出土遺物 .....	161
図71	11・14・16~18号溝跡、 11・16号溝跡出土遺物 .....	107	図108	土器器形分類図 .....	163
図72	12号溝跡 .....	108	図109	徳定A・B遺跡の主な中世の遺構 .....	168
図73	13・23号溝跡 .....	110	図110	ウマ骨格各部の名称 .....	172
図74	15号溝跡 .....	112	図111	出土骨 .....	175
図75	15号溝跡出土遺物 .....	113	図112	楕型鍛治溝の顕微鏡組織(1) .....	180
図76	19~21号溝跡・出土遺物 .....	115	図113	楕型鍛治溝の顕微鏡組織(2) .....	181
図77	1号祭祀跡・出土遺物 .....	117	図114	木材顕微鏡写真(1) .....	184
図78	1号祭祀跡出土遺物 .....	118	図115	木材顕微鏡写真(2) .....	185
図79	2号祭祀跡・出土遺物 .....	120	図116	木材顕微鏡写真(3) .....	186
図80	2号祭祀跡出土遺物 .....	121	図117	木材顕微鏡写真(4) .....	187
図81	3号祭祀跡 .....	122	図118	木材顕微鏡写真(5) .....	188
図82	3号祭祀跡遺物出土状況(1) .....	123	図119	木材顕微鏡写真(6) .....	189
図83	3号祭祀跡遺物出土状況(2) .....	124	図120	木材顕微鏡写真(7) .....	190

[ 表 ]

表1	周辺の遺跡一覧(1) .....	8	表4	土坑一覧(2) .....	42
表2	周辺の遺跡一覧(2) .....	9	表5	土坑一覧(3) .....	43
表3	土坑一覧(1) .....	41	表6	小穴一覧(1) .....	135

## あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大规模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しています。その一環として、阿武隈川の河川改修に伴う発掘調査にも携わってきました。

本報告書は、令和2年度に実施した阿武隈川上流河川改修事業御代田地区遺跡発掘調査における徳定A・B遺跡の調査成果をまとめたものです。郡山市南部に位置する御代田地区は、国土交通省東北地方整備局が策定した「阿武隈川水系河川整備計画」の工区の1つとしてもともと堤防整備が予定されていました。その後、令和元年10月の台風第19号により甚大な被害が発生した阿武隈川の防災・減災対策として策定された「阿武隈川緊急治水対策プロジェクト」により、御代田地区的堤防整備が急がれることとなりました。

徳定A・B遺跡では、古墳時代後期～終末期と鎌倉～室町時代の集落跡を確認しました。古墳時代の集落跡は、過去に実施された東北新幹線関連遺跡発掘調査において確認された集落跡の続きとなります。鎌倉～室町時代の集落跡は、堀跡と溝跡で区画された掘立柱建物跡・方形堅穴建物跡・土坑・井戸跡などが確認されました。

本報告書を、郷土の歴史研究の基礎資料として、さらにはふるさとの文化を理解するための資料として、生涯学習の場などで広く活用していただければ幸いです。

終わりに、今回の発掘調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地域住民の皆様に厚くお礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団  
理事長 鈴木淳一

表7 小穴一覧(2) .....	136	表15 小穴一覧(10) .....	144
表8 小穴一覧(3) .....	137	表16 かわらけ・陶磁器の点数 .....	165
表9 小穴一覧(4) .....	138	表17 検出動物分類群一覧 .....	171
表10 小穴一覧(5) .....	139	表18 骨同定結果 .....	172
表11 小穴一覧(6) .....	140	表19 供試材の履歴と調査項目 .....	176
表12 小穴一覧(7) .....	141	表20 供試材の化学組成 .....	179
表13 小穴一覧(8) .....	142	表21 出土木材同定 .....	183
表14 小穴一覧(9) .....	143		

[写真]

1 遺跡全景 .....	193	32 1号井戸跡 .....	214
2 遺跡全景 .....	194	33 1・2号溝跡全景 .....	215
3 調査区全景 .....	194	34 5・6号溝跡 .....	215
4 調査区北半部 .....	195	35 3号溝跡 .....	216
5 調査区南半部 .....	195	36 4号溝跡 .....	217
6 基本土層 .....	196	37 8・10号溝跡 .....	218
7 1号住居跡全景 .....	197	38 12・22号溝跡 .....	218
8 1号住居跡細部 .....	197	39 11・14・16・17号溝跡 .....	219
9 2号住居跡全景 .....	198	40 13・23号溝跡 .....	219
10 3号住居跡 .....	198	41 15号溝跡 .....	220
11 4号住居跡全景 .....	199	42 19~21号溝跡 .....	221
12 6号住居跡全景 .....	199	43 1・2号祭祀跡 .....	222
13 5号住居跡全景 .....	200	44 3号祭祀跡(1) .....	223
14 5号住居跡細部 .....	200	45 3号祭祀跡(2) .....	224
15 7号住居跡全景 .....	201	46 1号烟跡全景 .....	225
16 8号住居跡全景 .....	201	47 1・2号烟跡 .....	225
17 9号住居跡全景 .....	202	48 小穴・第2遺物包含層 .....	226
18 1号建物跡全景 .....	202	49 住居跡出土遺物 .....	227
19 2号建物跡 .....	203	50 住居跡・土坑出土遺物 .....	228
20 3号建物跡全景 .....	203	51 土坑・井戸跡出土遺物 .....	229
21 4号建物跡全景 .....	204	52 井戸跡出土遺物(1) .....	230
22 5・6号建物跡全景 .....	204	53 井戸跡出土遺物(2) .....	231
23 1・2・4~8号土坑 .....	205	54 井戸跡・溝跡出土遺物 .....	232
24 10・12~18号土坑 .....	206	55 溝跡出土遺物 .....	233
25 19~25・27号土坑 .....	207	56 祭祀跡出土遺物(1) .....	234
26 26・30・33~36・38号土坑 .....	208	57 祭祀跡出土遺物(2) .....	235
27 39・41~43・45~47・49号土坑 .....	209	58 祭祀跡出土遺物(3) .....	236
28 54・55・61・63~65・68号土坑 .....	210	59 祭祀跡出土遺物(4) .....	237
29 69・72~74・76・78~80号土坑 .....	211	60 祭祀跡・烟跡・小穴・遺物包含層 .....	
30 81~84・86~89号土坑 .....	212	出土遺物 .....	238
31 91・93・94・98・100・101・103・105・110号 土坑 .....	213		



# 第1章 遺跡の環境と調査経過

## 第1節 調査事業の経緯

阿武隈川は幹川流路延長239kmの一級河川である。その源流は西白河郡西郷村の旭岳で、中通り地方を北流し、阿武隈渓谷の狭窄部を経て、宮城県に入り、亘理郡亘理町と岩沼市にまたがる太平洋沿岸の河口部に至る。

阿武隈川では幾度となく洪水被害をもたらしてきた。江戸時代の享保8年(1723年)と享保16年(1731年)に守山藩領であった木賊田(徳定)村は、阿武隈川の洪水による被害を受け、藩の許しを得て現在の徳定に村を移している。

阿武隈川の河川整備は大正8年(1919年)から実施され、河道変更・河道掘削・築堤などが行われた。現在でも、整備以前の旧河道がみられる。しかし、これ以降も災害は頻発する。近年では、昭和61年(1986年)8月に戦後最大規模の洪水が発生した。この対応として、阿武隈川の支流広瀬川では堤防改修が行われた。平成10年(1998年)8月には、大規模な洪水が発生した。この洪水への対応として「平成の大改修」と称した築堤を中心とした治水対策が実施されたが、平成14年(2002年)7月にも大規模な洪水が発生した。平成23年(2011年)3月には、東日本大震災が発生し、河口部周辺には甚大な被害が生じた。さらに、令和元年10月には、台風第19号に伴う豪雨により、大規模な洪水が発生した。この対応として「阿武隈川緊急治水対策プロジェクト」が策定された。このプロジェクト中に、無堤防地帯で溢水被害のあった御代田地区における早期の築堤完了が位置付けられることになった。

(吉野)

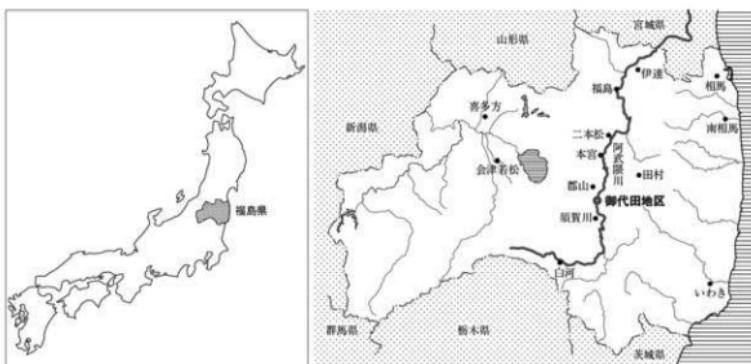


図1 御代田地区位置図

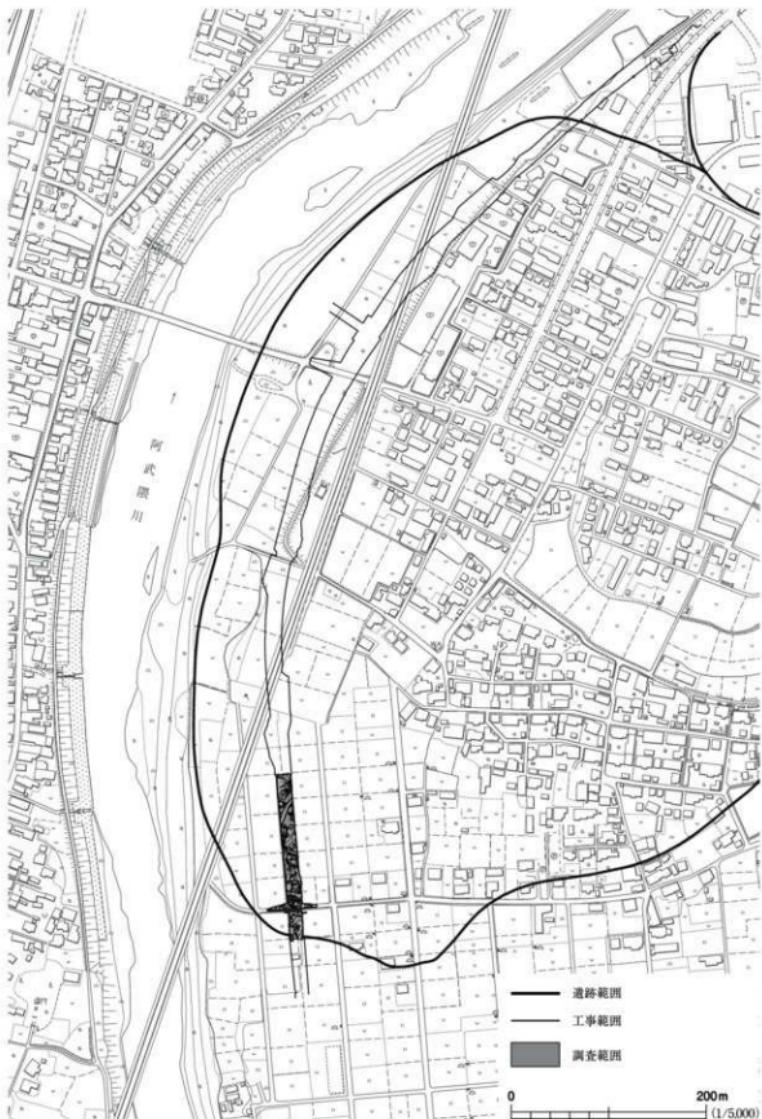


図2 工事範囲図

## 第2節 遺跡の位置と地理的環境

徳定A・B遺跡は、郡山市田村町御代田・徳定に所在する。郡山市は、福島県中通り地方中部に位置し、面積は757.20km<sup>2</sup>で、令和2年(2020年)の国勢調査による人口は約33万人である。

鉄道では、郡山市は東北本線、東北新幹線の通過点であるとともに、磐越西線、磐越東線、水郡線の分岐点ともなっている。徳定A・B遺跡から阿武隈川を挟んだ直線距離で、約500m西側にはJR東北本線・水郡線の安積永盛駅がある。

道路では、東北地方を縱断する国道4号と太平洋岸のいわき市と日本海岸の新潟市を結ぶ国道49号が交差し、同じく東北自動車道と磐越自動車道も交差する交通の要衝となっている。高速道路のインターチェンジも、東北自動車道が郡山・郡山南・郡山中央スマートインターの3箇所、磐越自動車道が郡山東と磐梯熱海の2箇所合計5箇所がある。

郡山市では、安積開拓事業によって原野は水田に生まれ変わり、平成17年(2005年)までは、市として全国一の米の生産高があった。現在でも農業出荷額の約半分が米となっている。徳定A・B遺跡が所在する田村町では、阿武隈川及び谷田川沿いの平地で、現在でも水田耕作が盛んである。一方、阿武隈高地に位置する丘陵部では、かつて養蚕業が盛んで多くの桑畑がみられた。

第2次産業では、市内には、大規模な工業団地が複数あり、平成26年(2014年)段階での製造業の製造出荷額が約8,545億円で、県内でも16.8%を占めている。東北3位、県内2位の製造品出荷額がある。

第3次産業も盛んで、東北2位、県内1位の商品販売額がある。郡山市は福島県内でも、経済と拠点となる都市で、各企業の支店営業所も多く設置されている。

福島県は、太平洋沿岸の浜通り、阿武隈高地と奥羽脊梁山脈の間の阿武隈川流域を中心とした中通り、奥羽脊梁山脈から越後山脈までの会津の3つの地方に分かれている。

郡山市は、中通りの中部に位置している。中通りは、南東の一部を除き、阿武隈川流域の地域が包括されている。南から白河盆地、須賀川盆地、郡山盆地、福島盆地の各盆地が位置し、その間は低位丘陵が発達した地形となっている。

郡山盆地は、阿武隈川とその支流付近の沖積地とそれより高位の郡山台地からなり、台地は、一部で河川による開析を受けており、特に北部及び阿武隈川東岸ではそれが良く認められる。

田村町御代田・徳定地区は、阿武隈川東岸の平坦部に位置している。西側には阿武隈川が隣接し、北から東側にかけては低い地形となっており、阿武隈川の旧河道であった三日月湖の痕跡が認められる。東側は谷田川まで平坦な地形が続き、南側は御代田集落南部から須賀川盆地まで続く低位丘陵地帯となっている。

徳定A・B遺跡はほぼ平坦面上に位置しているが、東半には阿武隈川の旧河道と思われる一段低い地形も認められる。今回の調査区は遺跡範囲の南端に位置しており、現地表面はほぼ平坦となっている。



図3 地形分類図

福島県内の地質は、東側の阿武隈高地で中生代白亜紀の花崗岩を主体とした地層が分布し、太平洋沿岸の浜通りは第三系、第四系の地層が主に分布する段丘となっている。阿武隈川流域を主体とした中通りは、新第三系、第四系と第四紀の火山噴出物が分布している。

会津は、新第三紀や第四紀の火山岩が広く分布し、猪苗代湖周辺や会津盆地などの平坦部には第四紀更新世から完新世の堆積物が分布している。

郡山盆地付近には、奥羽脊梁山脈東側にグリーンタフ由来の大久保層が堆積しており、盆地内には、最終氷期前半の郡山層や後半の大槻層などの段丘堆積物があり、低地には、阿武隈川やその支流による沖積層が形成されている。

徳定A・B遺跡は阿武隈川東岸の沖積地に位置しており、付近には、黒色シルト層や黄褐色粘土層とともに洪水砂層が堆積している。

福島県の気候は各地で大きく異なる。浜通りは太平洋側の気候、会津は日本海側の気候、中通りはその中間的な気候で、盆地内などの平野部では夏はむし暑く、冬は特に西側の奥羽脊梁山脈沿いを中心に雪も降る。

(藤 谷)

### 第3節 歴史的環境

郡山市には、数多くの遺跡が位置している。時代の概要とともに、発掘調査が実施された遺跡についても概観したい。

郡山市内では、11箇所の旧石器時代の遺跡が登録されている。この中でも、谷田川南側に広がる台地上に位置する弥明遺跡が調査され、ナイフ形石器や円形搔器など13点からなる石器群が検出されている。

縄文時代の遺跡は、阿武隈川東岸では、阿武隈高地西縁の低位丘陵緩斜面や阿武隈川やその支流が形成した河岸段丘上に多くが所在する。阿武隈川西岸では、阿武隈川支流の段丘上や郡山台地上に多くが所在している。

縄文草創期～前期の遺跡の調査例は少ない。市内では、大槻八頭遺跡から早期の竪穴住居跡5軒が見つかっている。

縄文中期になると調査例が増え、阿武隈川東岸では、妙音寺遺跡や鶴打A遺跡、倉屋敷遺跡などから、竪穴住居跡や貯蔵穴などが見つかっている。阿武隈川西岸では、市内西部に位置する上納豆内遺跡から複式炉を伴う時期の、中央に広場を持つ大規模な馬蹄形の集落が検出されている。

縄文後・晩期の遺跡では、谷田川沿いで荒小路遺跡が調査されている。大量の土器などとともに遺存状況の良好なハート型土偶も出土している。

弥生時代では、御代田集落の南側に、弥生時代前期の標識となる土器を出土した御代田B遺跡(14)があり、変形工字文や磨消縄文手法によって施された鉢類などがみつかっている。

古墳時代になると、丘陵上などに古墳が作られ、その周囲の大規模な集落遺跡も調査されるよう



図4 周辺の遺跡位置図

になる。

阿武隈川東岸では、正直B遺跡(20)と重複する前・中期の正直古墳群があり、破壊されたものも含めるとその数は43基となる。古墳群の南側には、古墳に付随する集落と思われる正直A遺跡(19)が調査され、大規模な集落や石製模造品の製作工房跡、大量の土器が置かれた祭祀跡などが見つかっている。谷田川東岸の丘陵頂部には、東北地方最大となる前方後方墳を含む大安場古墳群があり、国の史跡に指定されている。また、阿武隈川西岸には淵の上遺跡(79)があり、古墳の横穴式石室から突起付背や装飾の付いた刀が見つかっている。

この時期の集落遺跡も数多く調査されている。谷田川東岸の低位丘陵平坦部では、山中日照田遺跡、南山田遺跡、東山田遺跡などが調査されている。

律令制下、養老2年(718年)頃の福島県内は、白河郡、磐梯郡、会津郡、耶麻郡、安積郡、信夫郡、菊多郡、磐城郡、標葉郡、行方郡、宇多郡の11郡が配され、郡山市は安積郡に含まれる。安積郡では、市街地中央の清水台遺跡が郡衙推定地となっており、大型の掘立柱建物跡などが見つかっている。

集落遺跡も調査されており、正直C遺跡から多くの堅穴住居跡と掘立柱建物跡が調査されている。また、阿武隈高地西縁に位置する東丸山遺跡でも、多数の堅穴住居跡と掘立柱建物跡が見つかっている。

源賴朝による奥州合戦後、阿武隈川西岸の安積郡は伊東氏の一族の支配を受けるようになる。この時期で調査された大規模な遺跡には、荒井猫田遺跡(73)がある。東山道沿いにあった主郭と町屋からなる大規模な中世の遺跡で、建物跡、陶磁器類とともに、本遺跡からも検出された木棒の井戸も見つかっている。一方、阿武隈川東岸は田村荘となり、田村荘司田村氏が実質的な支配を行っていた。応永3年(1396年)の田村荘司の乱で田村氏が没落し、平姓田村氏の支配へと移り変わっていく。

応永6年(1399年)には南奥支配のため、阿武隈川西岸に篠川御所(篠川館跡)(49)が置かれ、篠川公方として足利満直が下向した。

戦国期には、郡山市は宿場町として栄えたものの、白河結城氏、田村氏、二階堂氏、蘆名氏、伊達氏等の勢力争いの場となった。織豊期になると、天正8年(1580年)から9年(1581年)にかけて、御代田城(15)をめぐる佐竹氏と田村氏の戦い(御代田合戦)が勃発している。

中世を通じての大規模な城館の調査例として、市内富久山町にある大鎧館跡が調査されており、3つの郭とそれに伴う堀と土塁、建物跡や井戸などが検出されている。

また、郡山市内には中世の石造供養塔類も点在しており、徳定A・B遺跡周辺では、徳定供養塔群(3)、甚日寺供養塔群(9)などがあり、甚日寺供養塔群には、郡山市の指定文化財である板碑「甚日寺供養塔」と「護摩堂趾供養塔」がある。

近世になると、郡山市の大部分が二本松藩領となり、市域は奥州街道の宿場町として栄えた。田村町は18世紀初頭に守山藩領となっている。守山城の調査では織豊期に構築された「野面積み」による石垣も見つかっている。

表1 周辺の遺跡一覧（1）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	德定A・B遺跡	田村町徳定字塚ノ越・芋干場	縄文～平安・中世	集落跡
2	金屋館跡	田村町金屋字塚ノ越・中河原	中世	城館跡
3	徳定供養塔群	田村町徳定字妻沢	中世	石造物
4	阿弥陀堂供養塔群	田村町徳定字妻沢	中世	石造物
5	石仏供養塔群	田村町御代田字石仏	中世	石造物
6	御代田廻寺跡	田村町御代田字石仏	中世	社寺跡
7	狐坦古墳	田村町御代田字狐坦	古墳	古墳
8	狐坦遺跡	田村町御代田字狐坦	古墳～平安	散布地
9	甚日寺供養塔群	田村町御代田字北町	中世	石造物
10	御代田館跡	田村町御代田字館	中世	城館跡
11	繩折場遺跡	田村町御代田字繩折場	奈良・平安	散布地
12	西田B遺跡	田村町正直字西田	奈良・平安	散布地
13	西田A遺跡	田村町正直字西田	奈良・平安	散布地
14	御代田B遺跡	田村町御代田字瀬ノ上	弥生	散布地
15	御代田城跡	田村町御代田字中林	中世	城館跡
16	御代田古墳群	田村町御代田字中林	古墳	古墳
17	中林遺跡	田村町御代田字中林	縄文・弥生・平安	散布地
18	椎現作田B遺跡	田村町御代田字椎現作田	弥生・奈良・平安	散布地
19	正直A遺跡	田村町正直字蓬沼	古墳～平安	集落跡・祭祀跡
20	正直B遺跡（正直古墳群）	田村町正直字北畠	弥生～古墳	集落跡・古墳
21	平船跡	田村町金屋字平船	中世	城館跡
22	水神遺跡	田村町金屋字水上	平安	散布地
23	正直船跡	田村町正直字竹ノ内・新船	中世	城館跡
24	菜根屋敷遺跡	菜根屋敷	古墳～平安	散布地
25	深沢遺跡	深沢一丁目・七ツ池町	弥生	散布地
26	久留米遺跡	久留米二丁目	縄文	散布地
27	名倉遺跡	山崎	弥生	散布地
28	安倍遺跡	安積町荒井字安倍・北井後	縄文～平安	散布地
29	郷子山遺跡	安積町荒井字安倍・上北井前	縄文	散布地
30	打登喜遺跡	安積町荒井字打登喜	縄文	散布地
31	下椎現遺跡	安積町荒井字下椎現	縄文～平安	散布地
32	大根畠遺跡	安積町荒井字大根畠	古墳～平安	集落跡
33	宝光寺供養塔	安積町荒井字東堀敷	中世	石造物
34	大欠遺跡	安積町荒井字打大欠	奈良	散布地
35	成山西遺跡	成山町	奈良・平安	散布地
36	成山遺跡	成山町	縄文・奈良・平安	散布地
37	長久保遺跡	安積町長久保一丁目	古墳～平安	散布地
38	成山館跡	成山町	中世	城館跡
39	鰐巻田遺跡	安積一丁目	縄文・弥生・平安	散布地
40	廣町遺跡	安積町荒井字人星段・飯塚	奈良	散布地
41	八幡遺跡	安積一丁目	縄文・平安	散布地
42	洪清水遺跡	篠川二丁目	縄文	散布地
43	清水の上遺跡	篠川三丁目	縄文	散布地
44	篠川供養塔群	安積町篠川字高石坊	中世	石造物

表2 周辺の遺跡一覧（2）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
45	明見塚古墳	安積町笠川字明見前	古墳	古墳
46	四角坦古墳	安積町笠川字四角坦	古墳	古墳
47	天性寺供養塔	安積町笠川字御所前	中世	石造物
48	明覚寺跡	安積町笠川字經坦	中世	社寺跡
49	羅川船跡	安積町笠川字羅川・高瀬・東船	中世	城船跡
50	高瀬遺跡	安積町笠川字高瀬	平安	散布地
51	篠川供養塔A	安積町笠川字篠川	中世	石造物
52	篠川供養塔B	安積町笠川字東館	中世	石造物
53	東船遺跡	安積町笠川字東船	弥生	散布地
54	日光池西道路	安積町笠川字日光池西	奈良	散布地
55	新宅供養塔	安積町笠川字熊野南	中世	石造物
56	上の台供養塔	安積町笠川字上ノ台	中世	石造物
57	経藏道路	安積町笠川字経藏	弥生	散布地
58	彼岸塚古墳	安積町笠川字彼岸塚・瓜井平	古墳	古墳
59	瓜塚道路	安積町笠川字道伝	古墳	散布地
60	堀橋遺跡	安積町笠川字堀橋・陣場	奈良・平安	散布地
61	陣場遺跡	安積町笠川字陣場	古墳～平安	散布地
62	七ツ池遺跡	七ツ池	奈良	散布地
63	香久池遺跡	香久池一丁目	弥生	散布地
64	法久寺供養塔群	香久池二丁目	中世	石造物
65	小原田供養塔	小原田一丁目	中世	石造物
66	古川遺跡	古川	弥生	散布地
67	旱木館跡	小原田二丁目	中世	城船跡
68	野毛館跡	小原田二丁目	中世	城船跡
69	鹿島館跡	小原田三丁目	中世	城船跡
70	宮西道路	安積町日出山二丁目	古墳～平安	散布地
71	二渡神社供養塔群	安積町日出山二丁目	中世	石造物
72	日出山供養塔	安積町日出山三丁目	中世	石造物
73	荒井塚道路	安積町荒井字塚田・南千保	中世	船路・町跡・道路
74	道場遺跡	安積町荒井字道場	奈良・中世	散布地
75	南千保遺跡	安積町日出山三丁目	绳文～古墳	散布地
76	旧屋敷遺跡	安積町笠川字館ノ越・新缺	绳文	散布地
77	西森原遺跡	笠川一丁目	弥生	散布地
78	東笠原遺跡	笠川一丁目・笠川字南台	平安	散布地
79	潤の上遺跡	安積町笠川二丁目	绳文・古墳	東落跡・古墳
80	香久池経塚	香久池一丁目	近世	塚
81	荒井館跡	貫正	中世	城船跡
82	八雲道路	安積町荒井字八雲・撫子	古墳～平安	散布地
83	畠田道路	安積町荒井字畠田・馬牧場	平安	散布地
84	大垣古墳	安積町四丁目	古墳	古墳
85	明覚寺跡	安積町笠川字圓角坦	中世	社寺跡
86	當堂古墳	安積町笠川字當堂	古墳	古墳
87	念仏坦古墳	安積町笠川字念仏坦	古墳	古墳
88	荒井館跡	安積町字荒井	中世	城船跡

近代になると、明治12年(1879年)に国の直轄事業安積開拓事業が開始され、市内の西部に広がる台地に、猪苗代湖から安積疊水が引かれ、全国でも有数の米作地帯に生まれ変わった。現在市内にはこの時代の中心的な建物となった開成館があり、国の重要文化財に指定されている。

郡山市域の行政区は、幕末にあった78の村が、明治の合併で1町31村となり、昭和の合併により1市7町7村から、最終的に現在の市域となり、平成9年(1997年)には東北初となる中核市に指定されている。

徳定A・B遺跡が位置する付近は、近世守山藩の御代田村と徳定村にあたり、明治維新後もそのまま継続し、明治22年(1889年)の町村制の施行により、大善寺村、正直村などとともに守山村に合併された。更に昭和30年(1955年)に谷田川村及び高瀬村の一部と合併して田村町となり、昭和40年(1965年)に郡山市に合併され、今日に至る。

(藤 谷)

#### 第4節 調査経過と調査方法

**調査経過** 徳定A・B遺跡は、昭和47年(1972年)に徳定A遺跡、昭和49・50年(1974・1975年)に徳定B遺跡の発掘調査が福島県教育委員会により実施された。徳定A遺跡からは古墳時代後期の集落跡が確認され、今回の調査範囲西側の橋脚部分から、著名な弥生時代の人面付土器の頭部が出土している。徳定B遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が確認された。平成8年(1996年)刊行の『福島県遺跡地図』には徳定A・B遺跡として登録されている。

平成17年(2005年)から平成25年(2013年)にかけて、郡山市により土地区画整理事業に伴う発掘調査が6次にわたって実施された。この発掘調査では古墳時代後期から平安時代の集落跡が確認され、それに加え古墳時代前期・中期の竪穴住居跡や中世の遺構も確認された。

阿武隈川上流河川改修事業御代田地区に連関して徳定A・B遺跡では、令和元年(2019年)11月に実施した確認調査で3,000m<sup>2</sup>の要保存面積が確定された。御代田地区は無堤防地帯であることから、再度の被害を防ぐため、令和2年(2020年)に発掘調査を実施することになった。

令和2年の発掘調査にあたっては国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所(以下、福島河川国道事務所とする)・福島県教育委員会(以下、県教委とする)・(公財)福島県文化振興財団とで3者協定を結び、福島河川国道事務所と(公財)福島県文化振興財団が直接発掘調査業務委託を締結した。

4月上旬には発掘調査に先立ち、福島河川国道事務所・県教委・(公財)福島県文化振興財団とで連絡調整会議を開催し、事前準備の調整を行った。

発掘調査は3,000m<sup>2</sup>を対象面積とし、(公財)福島県文化振興財団の職員3名を配置し、4月20日から開始した。なお、バックホーによる表土除去・移動は、福島河川国道事務所の調査協力を得た。

5月上旬には表土除去・移動が終了し、中旬には休憩所やトイレの設置及び測量基準杭打設を実施した。この頃には、作業員による遺構検出作業を開始した。遺構検出作業では、調査区南部から

中央部にかけて多数の小穴と数条の溝跡を確認した。調査区北部では、隣接する水田からの浸水が著しく、遺構検出作業に困難を來した。5月下旬には調査区南部の土坑・溝跡・小穴などの精査・記録作業に着手し、1号土坑からは、鉄製獸足手取釜が出土した。5月の連絡調整会議では、調査区を横断する市道の取り扱いと下層の調査について協議を行った。

7月には、井戸跡や溝跡などの深い遺構の精査・記録を実施したが、その壁面・底面から下層のものとみられる遺物・遺構が確認できないことから、現地において県文化財課から下層の調査は不要であるとの判断を得て、7月の連絡調整会議において下層の調査は不要となった旨を報告した。7月下旬になると雨天が連続し、作業日の確保が困難となった。

8月4日・5日には郡山女子大学の考古学実習を実施した。8月下旬になると、調査区北部の浸水が僅かとなったため、畑跡・溝跡などの精査・記録調査に着手した。

9月上旬には市道を通行止めとし、この範囲の調査に着手した。市道脇の側溝については、既存のまま暗渠排水路となるため、調査は不要となった。9月中旬には、井戸跡の壁面が崩落したため、これ以上の調査継続は危険を伴うことから、県文化財課の承認を得て、井戸枠などを回収した後に福島河川国道事務所の協力を得てバックホーを用いて埋め戻した。

10月10日には本遺跡の現地公開を予定したが、雨天のため現地公開を中止し、休憩所内での遺物・写真パネルの展示を実施し、90名の参加者があった。10月20日には軽飛行機による空中写真撮影を実施した。同月下旬には調査区北西部の祭祀遺構の精査・記録が本格化した。この頃には、市道下の調査が終了した。

11月上旬には、調査区北部の遺物包含層の掘り下げを開始した。中旬には調査区南西部から堅穴住居跡を検出し、精査・記録を行った。同月下旬には、器材撤収、プレハブ、トイレの撤去などの現場撤収作業を実施した。11月30日には調査区を福島河川国道事務所に引渡した。

12月から3月までは、出土遺物の水洗い・ネーミング・接合など基礎的な整理作業を実施した。

**調査方法** 徳定A・B遺跡の発掘調査では、遺構の位置や遺物出土地点を明確にするため、1辺10mの方眼を調査区全域に設定した。この方眼をグリッドと呼称し、世界測地系による国土座標を基準とした。グリッドはX = 150.190、Y = 47.770を基点として、北から南へはアラビア数字で1・2・3…、西から東へはアルファベットでA・B・C…とした。これらを組み合わせてA 1・B 1・C 1…として各グリッドを表示した。なお、調査区西端部はA'を用いた。

表土の除去はバックホー0.45m<sup>3</sup>を用いた。遺構の精査にあたっては、遺構の特性に合わせて土層観察用の畔を設定し、堆積土の状況や遺物の出土状況に留意しながら実施した。

祭祀跡・遺物包含層・遺構外出土遺物の遺物の取り上げについては、L II・III・IV一括とした。

遺構の図化は遺構の規模に合わせて、断面図・平面図を縮尺1/10、1/20、1/40で作成した。調査区の遺構配置図は縮尺1/100で作成した。記録写真はデジタルカメラを使用した。

上記の記録・資料については整理作業を実施し、各種台帳を作成し閲覧可能な状態にした後、福島県文化財センター白河館で収蔵・管理の予定である。

(吉野)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 調査成果の概要と基本土層

#### 調査成果の概要(図5・6、写真3~5)

今回の調査区からは竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡6棟、土坑104基、溝跡22条、井戸跡2基、祭祀跡3箇所、烟跡2箇所、小穴1,483基、遺物包含層2箇所を確認した。出土遺物は縄文土器15点、弥生土器7点、土師器15,305点、須恵器7点、陶磁器354点、瓦質土器1点、土製品10点、木製品156点、石製品12点、石器1点、鉄製品126点、古銭49点、鉄滓231点、骨145点、土壁105点などである。

遺構の時期は古墳時代後期~終末期と中世で、遺構は調査区に隈無く分布する。各時期に属する遺構は、古墳時代後期では祭祀跡、烟跡、第2遺物包含層である。

古墳時代終末期では、1・2・5号住居跡である。

中世では3・4・6~9号住居跡、1~4号建物跡、井戸跡、小穴の他、土坑・溝跡の大半も入る。なお、3・4・6~9号住居跡、8・12号土坑などは中世の方形竪穴建物跡とみられる。

#### 基本層序(図7、写真6)

L Iは水田耕作土及び道路造成土で、層厚は20~50cmである。

L IIは調査区では部分的に確認し、L II a・bの2層に区分した。L IIは遺物を含むが、その量は少ない。さらに、祭祀跡や小穴を覆っているので、中世以降のものとすることができる。各層の層厚は、L II a灰黄褐色土が5~40cm、L II b褐色粗砂が20~40cmである。

L IIIは黒褐色および暗褐色を呈する土で、調査区中央以外において認められた。土質の違いによってa・bに区分し、さらに含有される榛名二ツ岳伊香保テフラ(H R - F P)とみられる白色粒の多少と、それ以外の含有物の有無によって①~③に細分した。L III aは黒褐色粘質土である。F Pを含有する①②は調査区北部に認められ、F Pが含まれない③は調査区南西部に認められる。L III bは黒褐色砂質土である。F Pを含有する①②は調査区北部の3号祭祀跡を覆っている。F Pを含有しない③は調査区中央部で認められ、8号住居跡、89・92・96・106号土坑などが本層を掘りこんで構築している。

L IVは調査区全域に認められた。土質や色調の際にによってa~dの4つに区分した。L IV aはにぶい黄褐色粘質土で、調査区北部に位置する遺構の検出面となっている。古い時期に阿武隈川によって形成された自然堤防の一部分とみられる。L IV b~L IV dは砂礫を主体とした層で、調査区中央~南部に位置する遺構の検出面となっている。L IV bはにぶい黄橙色粗砂、L IV cはにぶい黄褐色礫、L IV dはにぶい黄褐色砂で、いずれの層も非常にしまりがない。

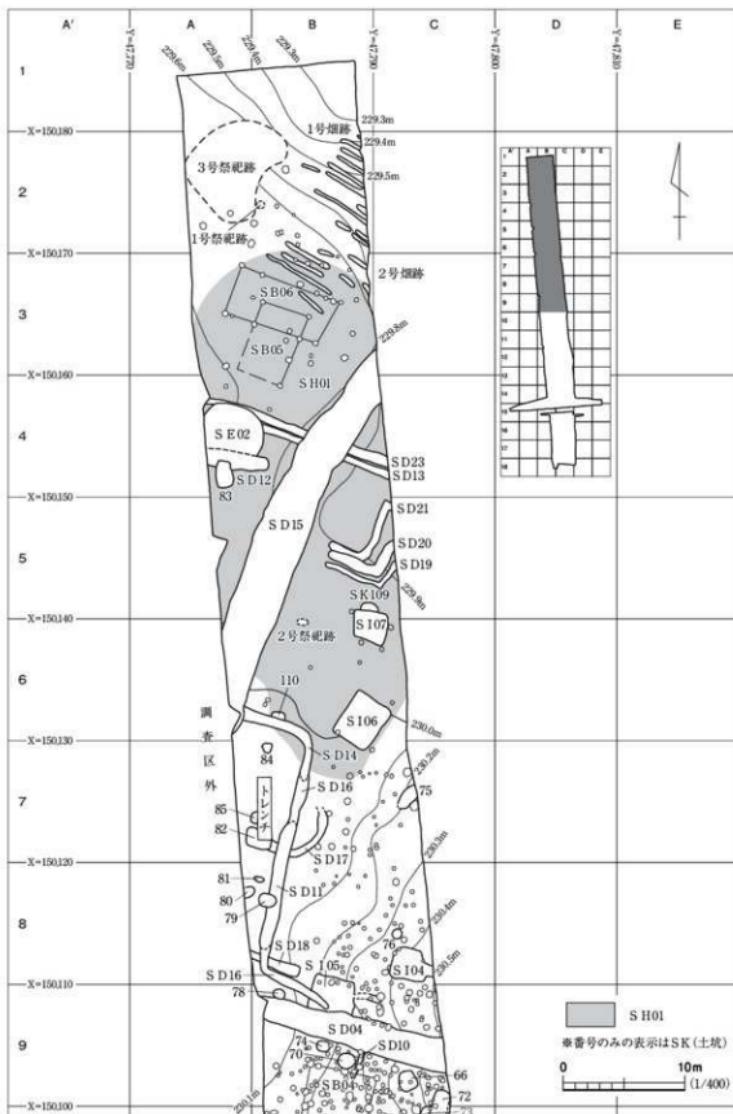


図5 遺構配置図（1）

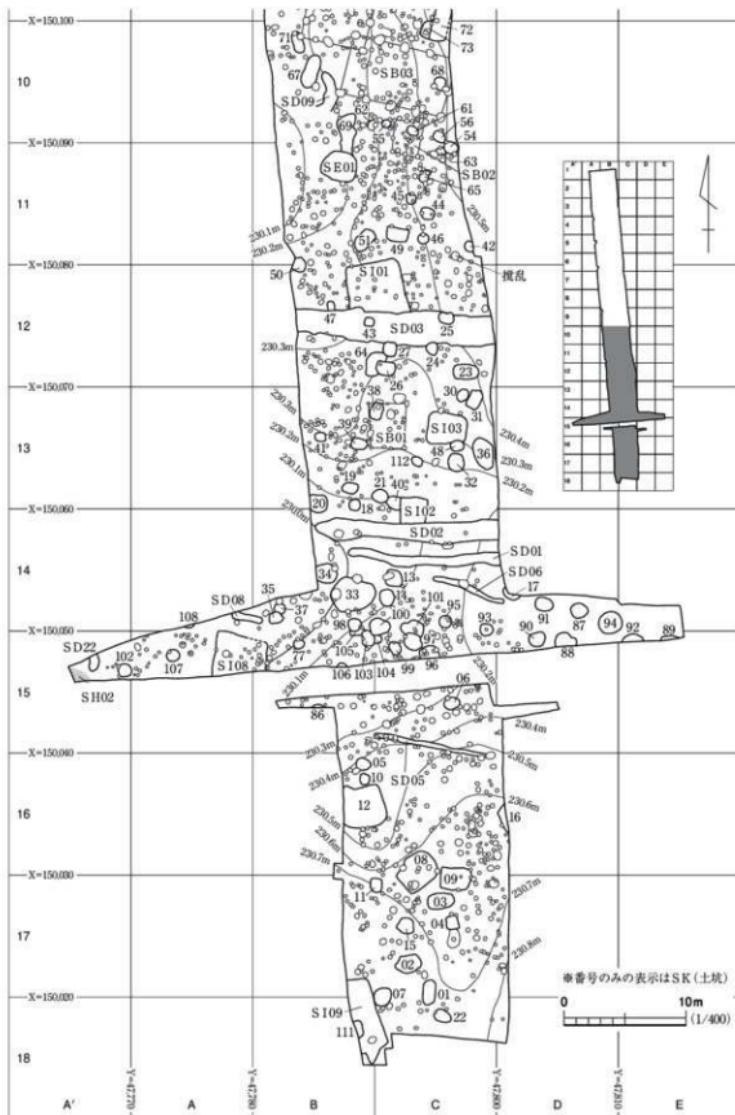


図6 遺構配置図(2)

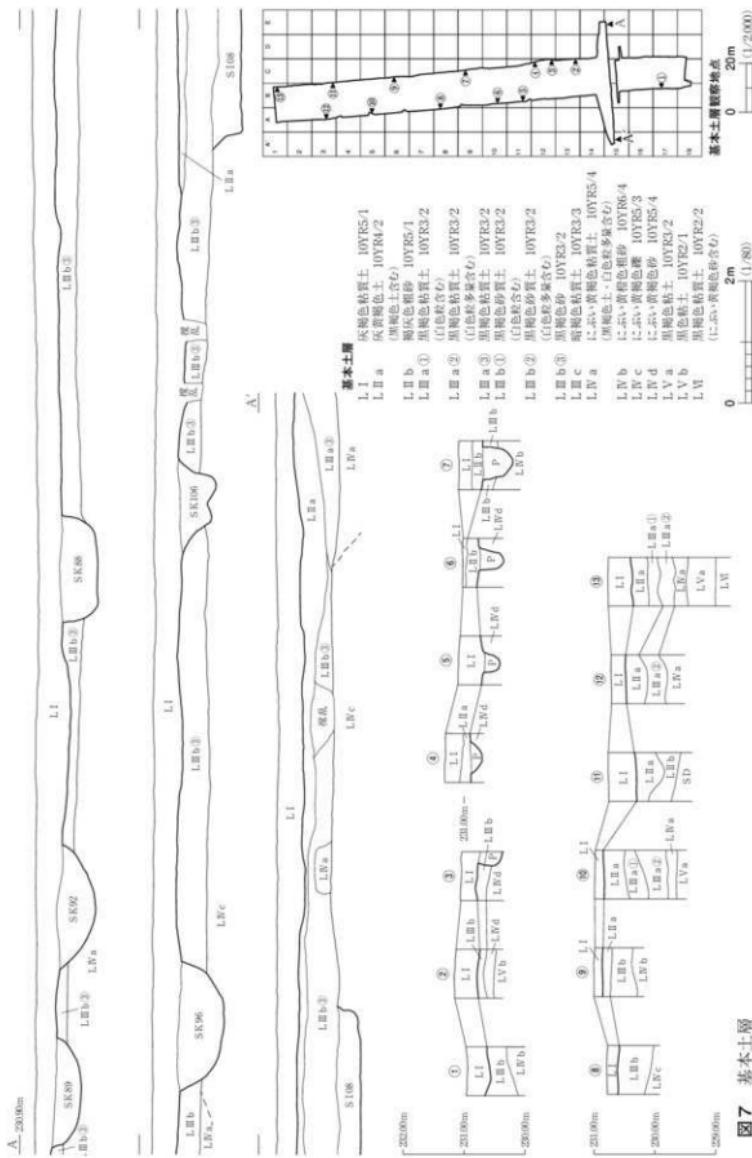


図7 基本十層

なお上述の土層のうち、調査区北部に堆積するL III aとL IV aの一部が遺物包含層となっていた。L VはL IVを掘り上げ後に確認し、L V a・bの2層に区分した。L V a黒褐色粘土は調査区北端部にて確認し、層厚15~30cmである。L V b黑色粘土は調査区D 13グリッドで確認した。いずれも層中に遺物は含まれていない。

L VIは調査区北端部で確認した黒褐色粘質土である。層中に遺物は含まれていない。(吉野)

## 第2節 壇穴住居跡

壇穴住居跡は9軒を検出した。そのなかでも3・4・6~9号住居跡については、中世の方形建物跡である。調査の段階で壇穴住居跡として遺構番号を付したため、本節に含めて報告する。

### 1号住居跡 S 1 01

#### 遺構(図8・9、写真7・8)

1号住居跡は調査区の中央部、B・C 12グリッドに位置し、L IV d上面で検出した。重複する遺構は3号溝跡・小穴で、住居跡が最も古い。

平面形は南辺が3号溝跡によって削平されているものの、方形と考えられる。方位は東壁でN 10°Wを示す。規模は東西4.7m、南北での遺存長4.6mである。周壁の高さは遺存良好な部分で10cmである。床面は、住居中央と南壁の一部では掘形底面であるL IV dをそのまま床面としている。また、各壁に並行するように、幅50~120cm、床面からの深さ20cmの溝状の掘形が認められ、この範囲には貼床が施されていた。

住居内堆積土は2層に分層した。 $\ell$  1は壇穴全体に堆積する黒褐色砂質土で自然堆積土とみられる。 $\ell$  2は住居周縁部の掘形を覆う人為的な埋土で、貼床の構築土である。

住居内の施設は、カマド1基、貯蔵穴1基(P 1)、床下ピット1基(P 2)である。

カマドは東壁中央に位置するが、遺存状況が極めて悪く、袖の一部と煙道を確認した。袖は左袖のみ遺存していた。最大幅25cm、遺存高10cmで、粘質土塊を含む砂質土を積んで構築している。袖の内面や燃焼部と思われる部分には、熱変化による変色などは認められなかった。煙道は幅70cmで、壁から長さ80cmほど延びる。煙道底面は住居壁から外側に向かって緩く傾斜し、先端部で緩やかに立ち上がる。煙道堆積土は3層に分層し、 $\ell$  3はカマドの袖や煙道天井の構築土に由来するとみられる。

P 1はカマドに向かって左側に位置する。南北130cm、東西110cmの楕円形で、深さは最大で20cmである。堆積土は1層で住居内堆積土 $\ell$  1と同じ土であることから、住居廃絶時には開口していたと考えられる。

P 2は住居南東部の掘形底面に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸72cm、短軸45cm、深さ20cmである。土坑の底面中央からは、底部を打ち欠いた土師器杯(図9-4)が正位で出土した。住

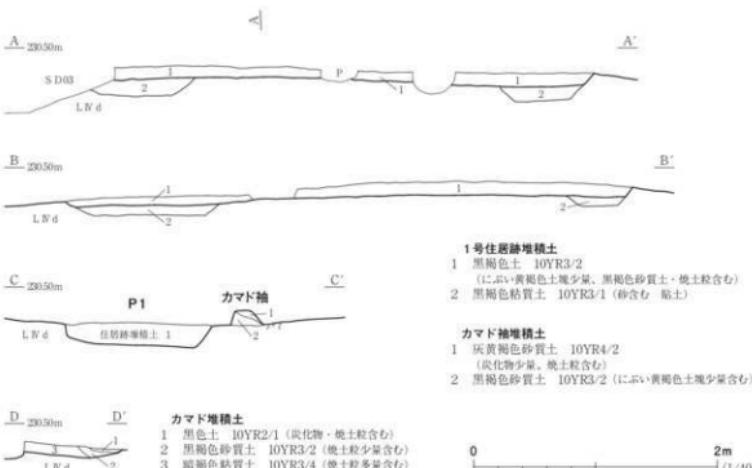
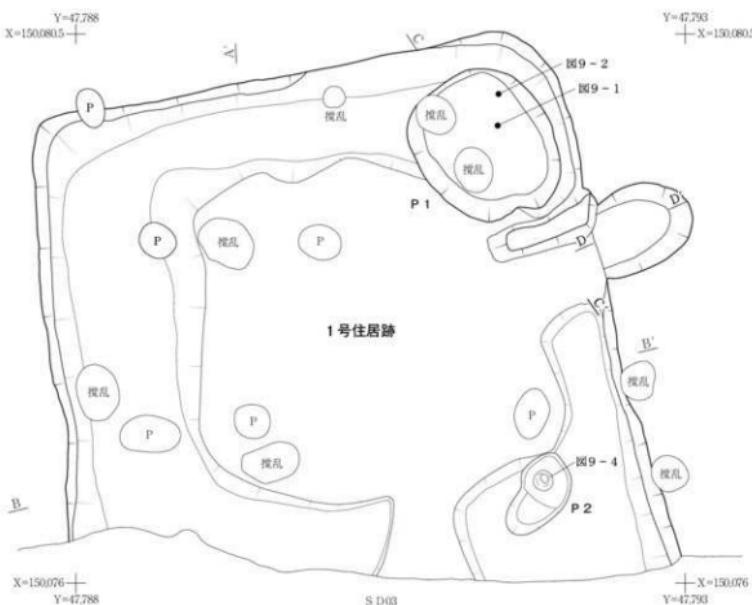


図8 1号住居跡

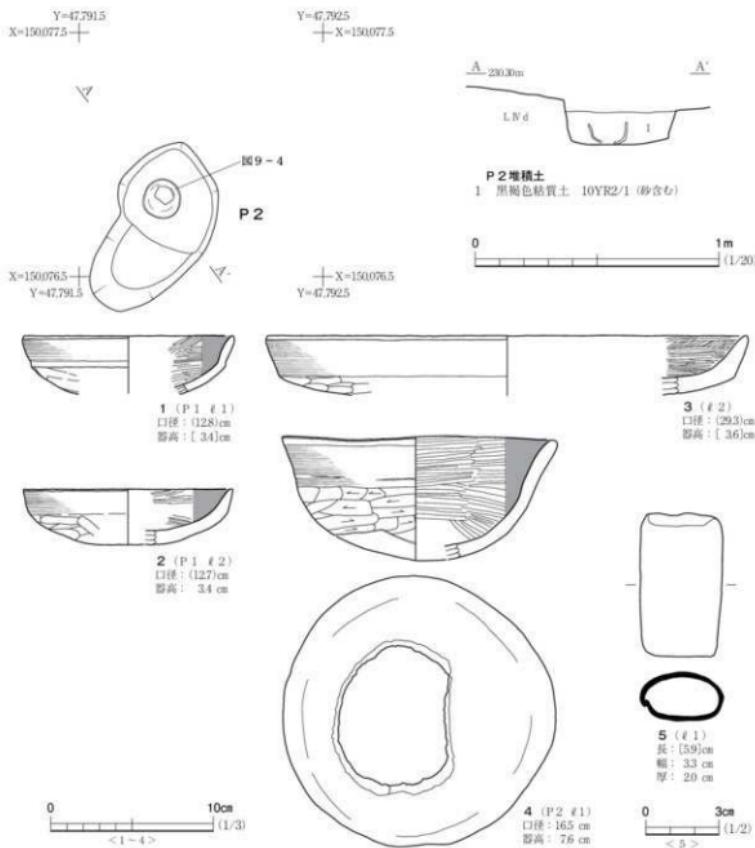


図9 1号住居跡・出土遺物

居構築時に意図的に遺棄したものと思われる。堆積土は貼床に近似した黒褐色土である。

### 遺物(図9、写真49)

1号住居跡からは土師器162点、陶器2点、鉄製品4点が出土した。図9-1~4は土師器杯で、外面は口縁部から体部上半にかけてはヨコナデ、体部下半はヘラケズリが、内面はヘラミガキがなされている。さらに、1・2・4の内面には黒色処理されているが、3の内面では黒色処理されず、口径が大きい特徴を有する。4は焼成後に底部を打ち欠いている。図9-5は鉄製鞆尻金具で、鉄板を楕円形に湾曲させて成形している。

### まとめ

1号住居跡は調査区で確認した住居跡のなかでも規模が大きく、貼床が施されている。P 2から出土した図9-4は、底部を打ち欠いて日常的な容器からの転換が図られ、埋納のような行為が想定できる。住居の時期は出土遺物から古墳時代終末期を考えている。  
(吉野・神林)

### 2号住居跡 S I 02

#### 遺構(図10、写真9)

2号住居跡は調査区南部のC 14グリッドL IV b上面で検出した。2号溝跡、40号土坑と重複する。住居との新旧関係は2号溝跡が新しく、40号土坑が古い。

住居は南壁が欠損しているが、平面形は長方形と推定している。規模は東西が22m、南北が現状で2.4m、壁の高さは0.1mである。床面は貼床が施されているが、あまり平坦ではない。堆積土は2層に区分し、 $\ell$  1が自然堆積土、 $\ell$  2が貼床土である。

住居施設はカマドとP 1~8である。カマドは北壁中央部に構築され、燃焼部のみが遺存している。燃焼部の奥行きは60cm、幅が52cmである。燃焼部の底面は部分的に焼土化していた。カマド堆積土を2層に区分し、いずれもカマドの袖を構築していた土に由来するとみられる。

### まとめ

2号住居跡からは土師器の細片が僅かに出土したのみで、時期の特定が困難である。だが、カマドが設置されていることから、古墳時代終末期と想定している。  
(吉野)

### 3号住居跡 S I 03

#### 遺構(図11、写真10)

3号住居跡は調査区南部のC 13グリッドに位置し、検出面はL IV b上面である。重複する遺構は48号土坑、小穴で、小穴が古く、48号土坑が新しい。

平面形は東西に長い長方形で、南北2.6m、東西3.2mである。周壁は大きく削平を受けており、遺存状況の良い部分でも10cmほどである。床面は、掘形底面であるL IV dをそのまま床面としている。

堆積土は4層に分層した。 $\ell$  1は黒褐色粘質土で、中央部に堆積していた。炭化物とにぶい黄褐色土塊が多量含まれる。また、スサを混ぜ込んだ痕跡のある焼土塊が非常に多く含まれていた。この焼土塊の一部には平滑にした面がみられることから、焼けた土壁とみられる。 $\ell$  2は暗褐色砂質土で主に西側の床面を覆っている。 $\ell$  1にみられた、にぶい黄褐色土塊や土壁が含まれている。 $\ell$  3は黒色土塊を含む暗褐色砂質土で、おもに東半分の床面を覆っていた。 $\ell$  4は壁溝に堆積する暗褐色粘質土である。貼床である可能性も考えられたが、全体的に縮まりが無く、踏み壓めによる硬化面もみられないことから、自然堆積土と考えられる。

本遺構内施設はP 1~3と壁溝がある。P 1は南壁と壁溝に重複する。規模は直径25cm、深さ15cmと小型で、焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積していた。P 2は東壁に接して位置している。

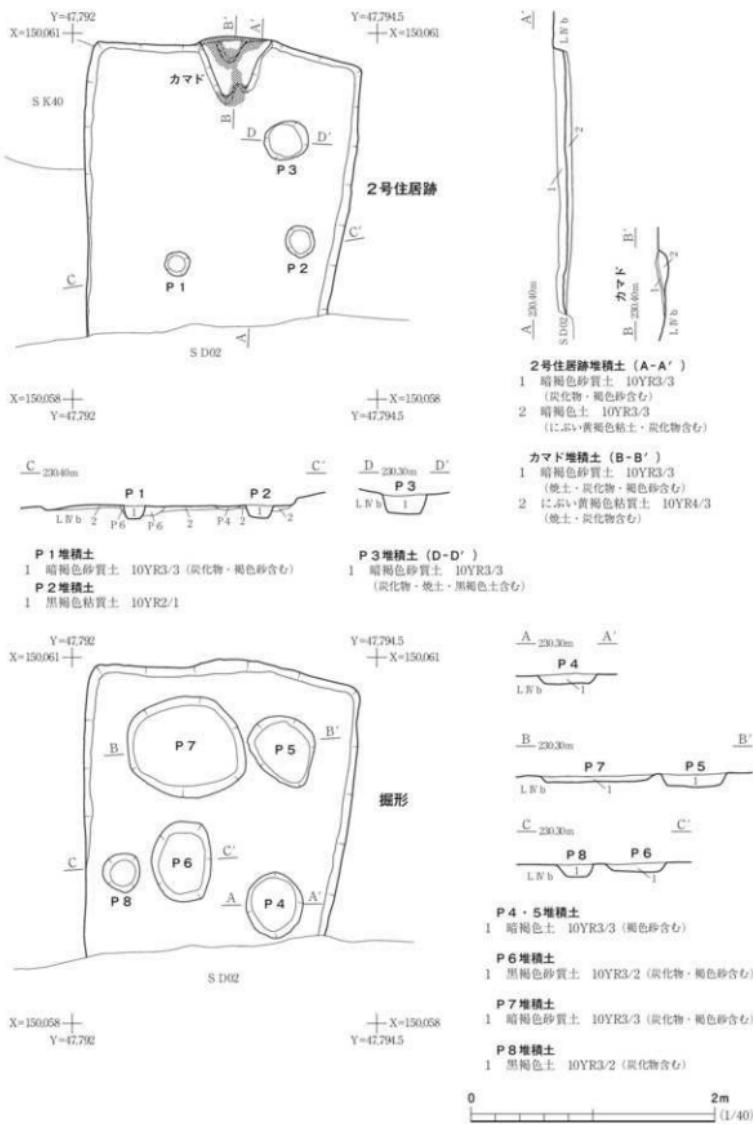


図10 2号住居跡

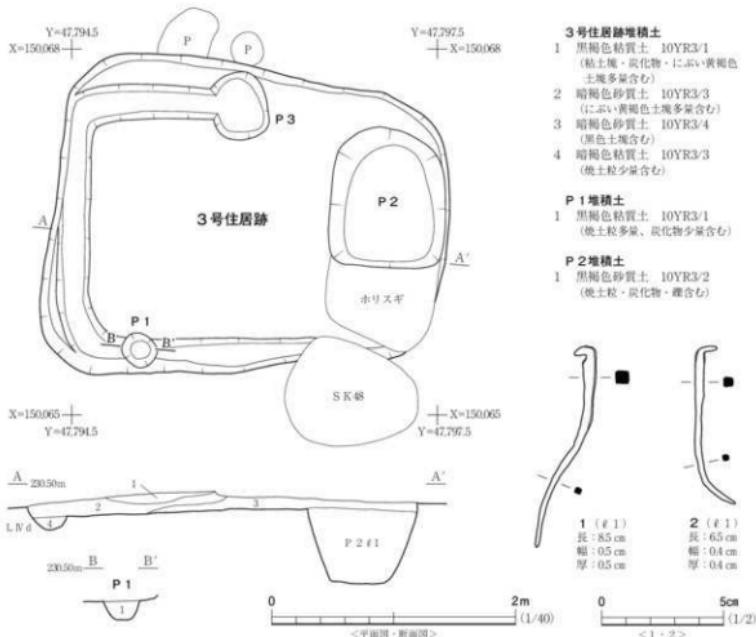


図11 3号住居跡・出土遺物

平面は東西に長い楕円形であり、南北1.1m、東西1m、深さ0.6mと比較的大型である。P 2堆積土は1層で、本遺構堆積土と様相を異にすることから、本遺構が埋没する以前には埋められていたと考えられる。P 3は北壁に接する位置にあり、壁溝と接続する直径50cm、深さ10cmほどの小型のピットである。

壁溝は北壁中央に位置するP 3から延び、西壁、南壁に沿って認められる。幅20~25cm、深さ10cmほどで、断面形状はU字状である。

#### 遺物 (図11, 写真49)

本遺構からは土器8点、かわらけ1点、陶器1点、鉄製品3点、土壁82点が出土した。図11-1・2は鉄釘で釘頭は屈曲し、先端部も曲がっている。断面形は方形をなす。土壁は2~5cm大の破片で、焼けてスサが含まれている(写真49)。

#### まとめ

3号住居跡は住居跡でしたが、中世の方形堅穴住居跡である。大型のピットや壁溝があり、堆積土中には多量の土壁が含まれていた。このことから一部に土壁を施した、倉庫や小屋といった機能の建物跡と想定される。

(吉野・神林)

#### 4号住居跡 S I 04

##### 遺構(図12、写真11)

4号住居跡は調査区中央部、C 8グリッドに位置し、検出面はL IV b上面である。重複する遺構は小穴で、本遺構が新しい。

平面形は東西に長い長方形で、規模は南北2.5m、東西3mである。周壁の高さは遺存状況の良い部分で50cmほどあり、床面から外傾しながら立ち上がる。なお東壁中央には床面から緩く立ち上がり、そのまま壁の外側に延びるスロープ状の施設があり、内部への入口施設とみられる。床面は掘形底面であるL IV bをそのまま床面としている。床面には細かな炭化物が認められ、そのなかには炭化米が含まれていた。

堆積土は9層に分層した。堆積範囲を大別するとℓ 1～3・5は東壁中央の入口施設に、ℓ 4・6～9は入口施設以外に堆積する。全体的に黄褐色土塊や炭化物・焼土粒などの混入物が多く、人為堆積土とみられる。

##### 遺物(図12、写真49)

本遺構からは土師器13点、かわらけ1点、陶磁器2点、鉄製品2点、古銭3点、鉄滓3点が出士した。図12-1は常滑焼の陶器のこね鉢で、体部下半の内面に磨減範囲が認められる。図12-2はロクロ成形のかわらけで、底部外面に回転糸切痕が認められる。図12-3は青磁の皿である。図12-4は鉄釘で釘頭は屈曲し、先端部も曲がっている。断面形は方形をなす。図12-5～7は古銭で、5は唐銭の「開元通寶」(621年初鋤)、6・7は北宋銭の「元豐通寶」(1078年初鋤)である。

##### まとめ

4号住居跡は住居跡としたが、いわゆる「方形堅穴建物」と呼称される、中世前期の建物跡である。東壁にスロープ状の入口施設を有する以外に、火処や柱穴といった内部施設は認められず、居住以外の機能が推定される。床面から炭化米が検出されている事から、小屋や倉庫として機能した可能性が考えられる。

(吉野・神林)

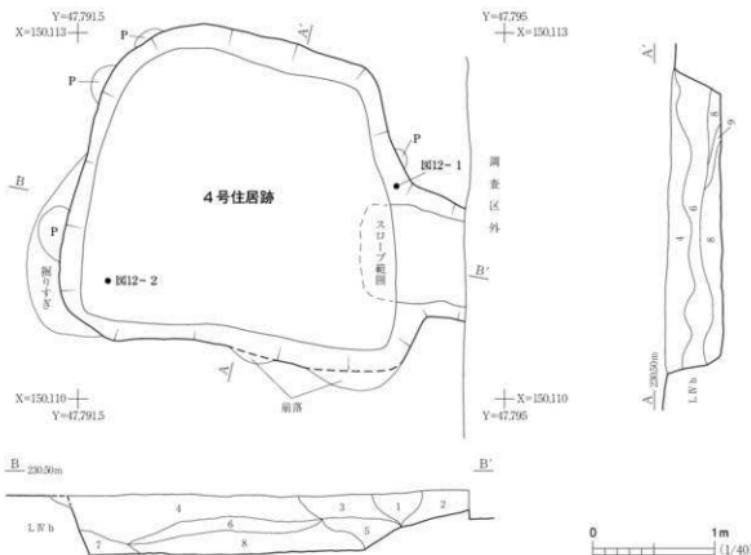
#### 5号住居跡 S I 05

##### 遺構(図13、写真13・14)

5号住居跡は、調査区中央部のB 8・9グリッドに位置する。検出層位はL IV b上面である。重複する遺構は4・16号溝跡、小穴である。住居からみた新旧関係は、4・16号溝跡、小穴が新しい。

住居の南壁が欠損しているが、平面形は長方形とみられる。規模は東西が現状で2.7m、南北が3.8m、壁の高さが0.12mである。床面は貼床が施されず、ほぼ平坦である。堆積土は1層で炭化物・焼土粒を含んでいることから人為堆積土とみられる。

住居施設はカマドのみである。カマドは東壁に構築され、燃焼部・袖・煙道で構成されている。



- 4号住居跡堆積土**
- |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色砂質土 10YR3/4 (黄褐色土塊含む)       | 6 暗褐色砂 10YR3/3                   |
| 2 黒褐色砂質土 10YR3/1 (黄褐色土塊含む)       | 7 暗褐色粗砂 10YR4/4 (にごい黄褐色粘質土塊少量含む) |
| 3 黑色砂質土 10YR2/1 (黄褐色土塊含む)        | 8 黑褐色粘質土 10YR3/2 (灰化物含む)         |
| 4 黑褐色砂質土 10YR3/1 (灰化物多量、焼土粒・礫含む) | 9 黄褐色粘質土 10YR5/4                 |
| 5 暗褐色砂 10YR4/4 (にごい黄褐色粘質土塊多量含む)  |                                  |

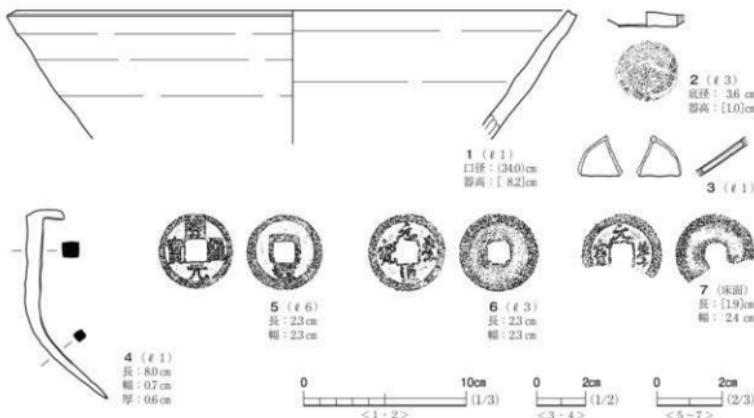


図12 4号住居跡・出土遺物

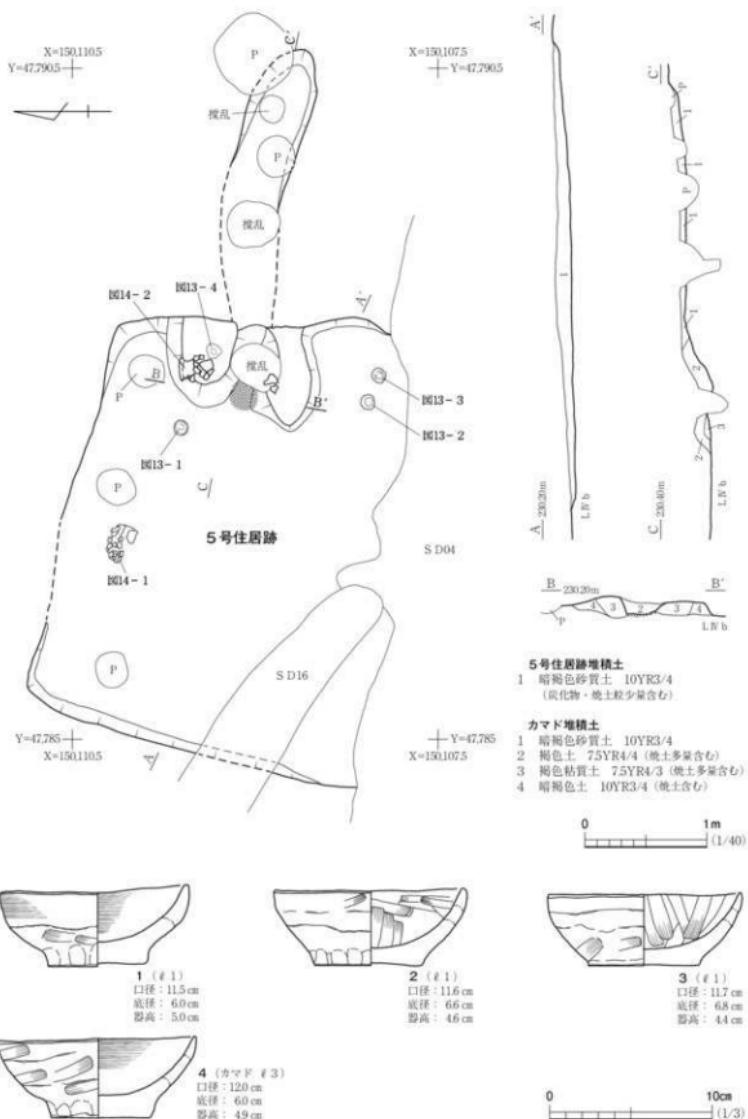


図13 5号住居跡・出土遺物

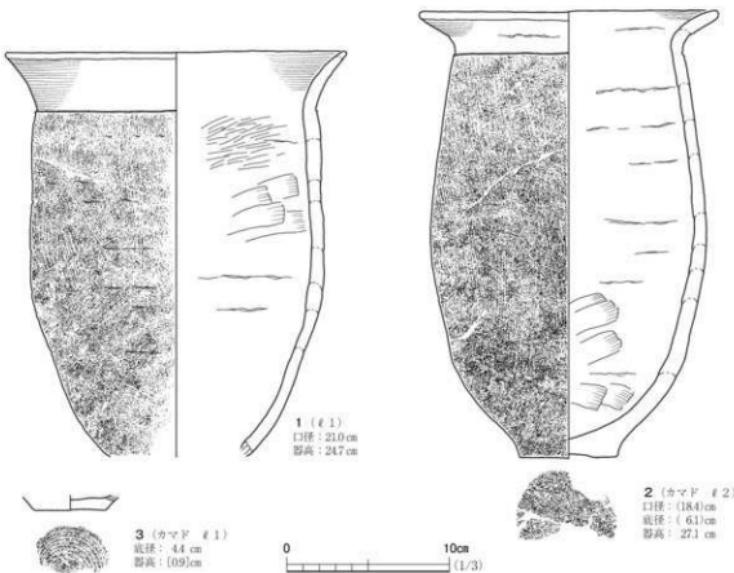


図14 5号住居跡出土遺物

カマドの長さは3.1mで、燃焼部の規模は奥行き0.8m、幅1.25mである。燃焼部の大半は小穴と重複し欠損しているが、底面は焼土化し、袖の幅は現状で54cmである。煙道は部分的に欠損しているが、現状で長さは2.28m、幅が0.52mである。煙道先端には、小穴状の煙出部は設けられず、溝状となっていた。

カマド堆積土は4層に区分した。 $\ell$  1は自然流入土、 $\ell$  2はカマド崩壊土、 $\ell$  3・4はカマド袖構築土である。

#### 遺物(図13・14、写真49)

本住居跡からは土師器156点、かわらけ1点、鉄製品1点が出土した。

図13-1～4は粗製杯である。その出土状況により、意図的に配置されたことがうかがわれる。1が正位置で、2・3は伏せて並列し、4はカマド袖内に埋め込まれていた。

1～4の器形は底部から口縁部にかけて逆「ハ」状に立ち上がり、底部はやや突出している。1～4の内面には、ヨコナデ、ナデなどの器面調整が丁寧に施されているが、外面のナデによる器面調整が部分的なため、粘土積み上げ痕がみられる。

図14-1は土師器瓶、図14-2は土師器長胴甕である。1・2とも口縁部と体部上半には段がみられ、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、体部内面はヘラナデなどの調整が施されている。

1の口縁部は外傾しながら立ち上がり、底部は焼成後に打ち欠いているので、甕の転用がうかがわ

れる。2はカマド廃絶後に、配置されていた。2の口縁部は屈曲し、立ち上がりが短く、底部外面には木葉痕がみられる。

図13-3はかわらけで、ロクロ成形によるもので、底部外面には回転糸切痕がみられる。

### まとめ

5号住居跡は調査区で検出された住居跡の中で、最もカマドの遺存が良好であった。

図13-1~4の粗製杯は、カマド構築から廃絶まで配置されていることから、カマドに関わる遺物として評価できる。時期は出土遺物から、古墳時代終末期を考えている。

(吉野)

## 6号住居跡 S I 06

### 遺構(図15、写真12)

6号住居跡は、調査区北部のB 6グリッド及びその周辺にあり、L III b ③上面で検出した。小穴と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。北方4m先には、7号住居跡が位置する。平面形は整った長方形で、主軸方向はN 36° Eである。規模は東西が3.3m、南北が4m、壁の高さは0.3mである。床面には貼床が施されていない。東壁南半部の傾斜が緩やかであることから、この辺りが入口であろうと推測している。堆積土は2層に区分した。いずれも本遺構が掘り込まれるL III bに近似しており、自然堆積土とみられる。

### 遺物(図15)

遺物は土師器11点、陶器2点、鉄製品5点が出土した。図15-1は在地産の陶器のこね鉢である。

### まとめ

6号住居跡は住居跡としたが、中世の方形堅穴建物跡である。3・4・9号住居跡のような関連施設などは確認できなかった。

(吉野)

## 7号住居跡 S I 07

### 遺構(図15、写真13)

7号住居跡は、調査区北部のC 6グリッド及びその周辺にあり、L III b ③上面で検出した。109号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。南方4m先には、6号住居跡が位置する。

平面形は、西壁が後世の搅乱により欠損しているが、長方形と考えている。規模は東西が現状で2.8m、南北が2.6m、壁の高さは0.2mである。床面には貼床が施されていない。堆積土は2層に区分した。いずれも本遺構が掘り込まれるL III bに近似しており、自然堆積土とみられる。

### 遺物(図15)

遺物は土師器31点、かわらけ1点、鉄製品3点が出土した。図15-2はかわらけで、手づくり成形である。

### まとめ

7号住居跡は住居跡としたが、3・4・6・8・9号住居跡と同様に、中世の方形堅穴建物跡で

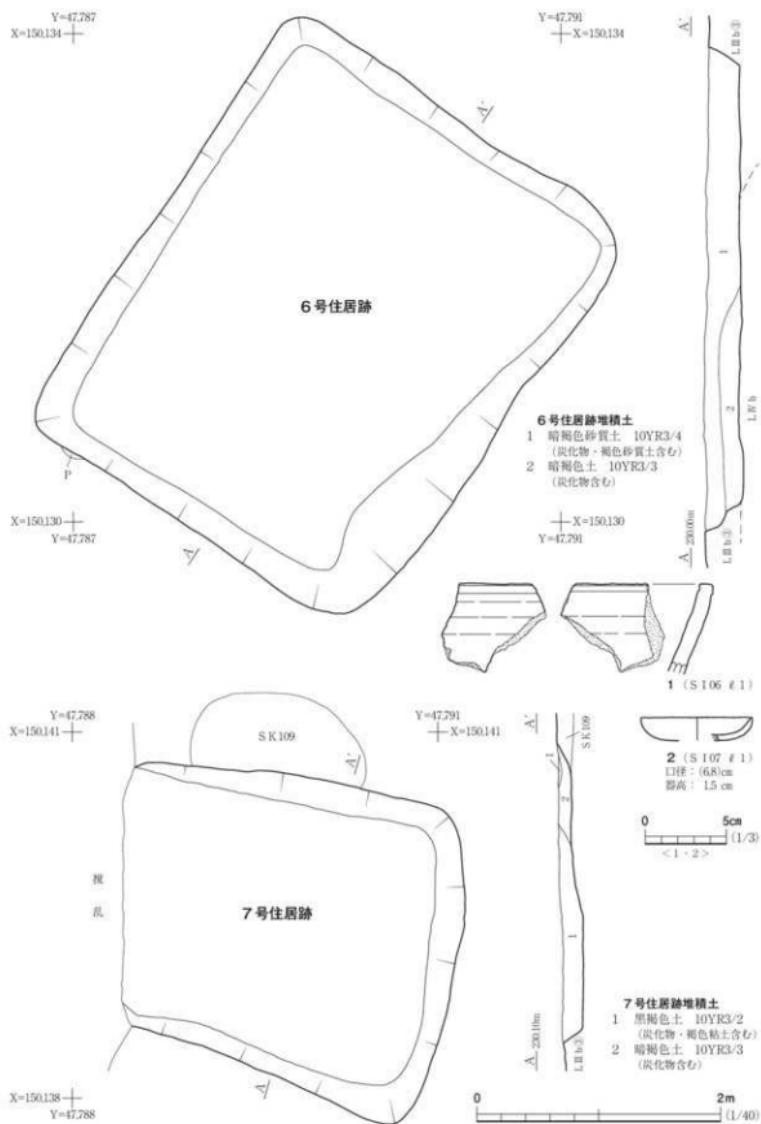


図15 6・7号住居跡、出土物

ある。なお、3・4・9号住居跡のような関連施設などは確認できなかった。 (吉野)

### 8号住居跡 S I 08

#### 遺構(図16、写真16)

8号住居跡は、調査区西部のA15・B15グリッド、LIVc上面で検出したが、掘り込み面はLIVb上面である。小穴と重複し、本遺構が古いものや新しいものがある。

平面形は南半部が調査区外にあるため明確ではないが、長方形と考えている。規模は東西が4.4m、南北が現状で3.7m、壁の高さは0.5mである。床面には貼床が施されていない。堆積土は3層に区分した。堆積状況から、人為堆積と考えている。

#### 遺物(図16、写真50)

本遺構からは土師器5点、陶器4点、鉄滓8点が出土した。図16-1・2は陶器で、1は常滑焼のこね鉢、2は在地産の瓷器系擂鉢である。内面に掘り目がみられる。

#### まとめ

8号住居跡は住居跡でしたが、中世の方形堅穴建物跡である。同様の遺構である3・4・6・7号住居跡と比べると、規模が大きいのが特徴である。 (吉野)

### 9号住居跡 S I 09

#### 遺構(図17、写真17)

9号住居跡は、調査区西南端のB17・18グリッド、LIVb上面で検出した。111号土坑・小穴と重複し、いずれも本遺構が古い。本遺構の平面形は、その西半部が調査区外にあるため明確ではないが、長方形と考えている。規模は東西が現状で2.4m、南北が5.7m、壁の高さは0.3mである。床面には貼床が施されていない。堆積土は3層に区分し、ℓ1には炭化物が、ℓ2・3にはLIVbに起因する砂が含まれていた。南壁には、南側に1m張り出したスロープ状の入口施設が設けられている。いずれも自然堆積土とみられる。

#### 遺物(図18、写真50)

本遺構からは土師器10点、陶器7点、かわらけ1点、鉄製品1点が出土した。図18-1~4は陶器で、常滑焼である。1・4は壺もしくは壺、2・3はこね鉢である。1の口縁部は幅広く折り返され、3の底部は高台となっている。4は内外面ともナデが施されている。

図18-5・6は土師器杯で、外面は口縁部から体部上半にかけてはヨコナデ、体部下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されている。6の内面には黒色処理されているが、被熱により部分的に消失している。図18-7は須恵器高台付盤で、口径が大きいのが特徴的である。

図18-8は鉄釘で、釘頭は屈曲し、先端部も曲がっている。断面形は方形をなす。

#### まとめ

9号住居跡は住居跡でしたが、中世の方形堅穴建物跡である。同様の遺構である3・4・6~8

第2節 堅穴住居跡

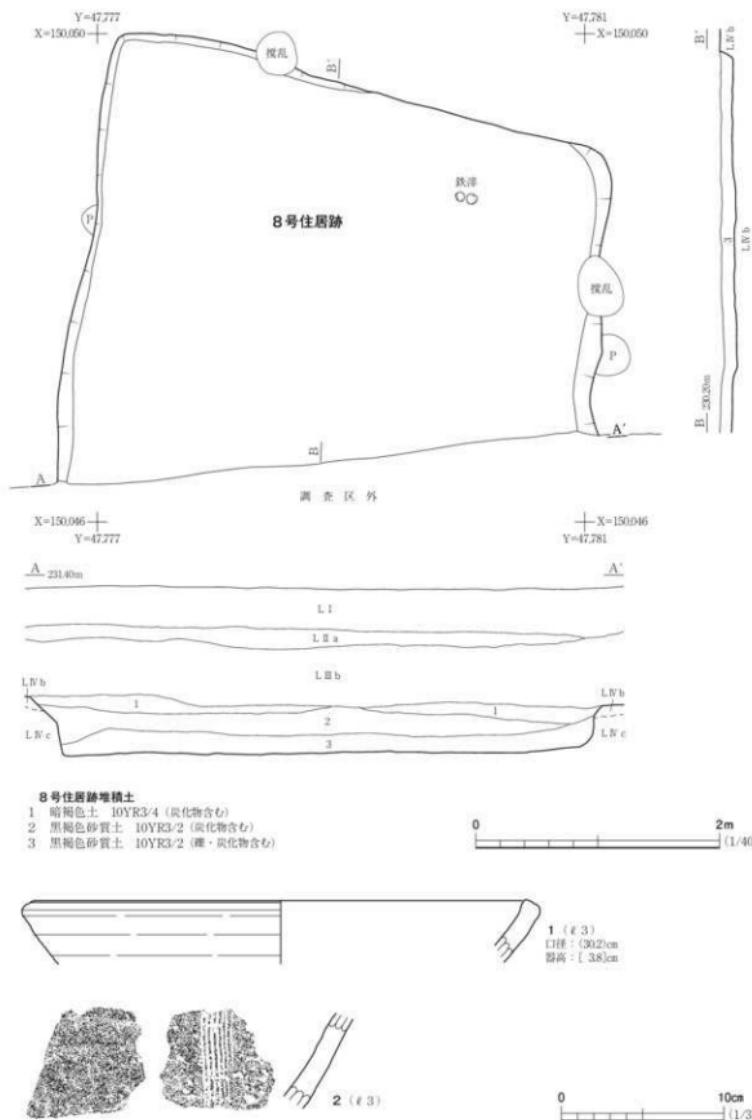


図16 8号住居跡・出土遺物

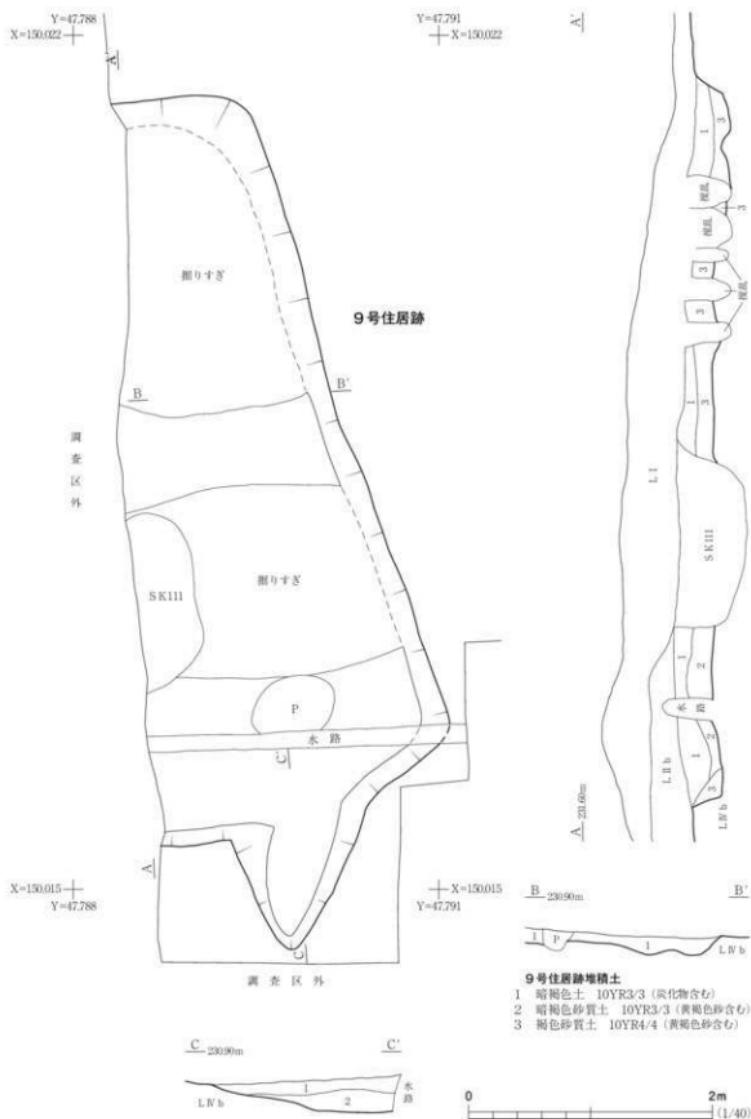


図17 9号住居跡

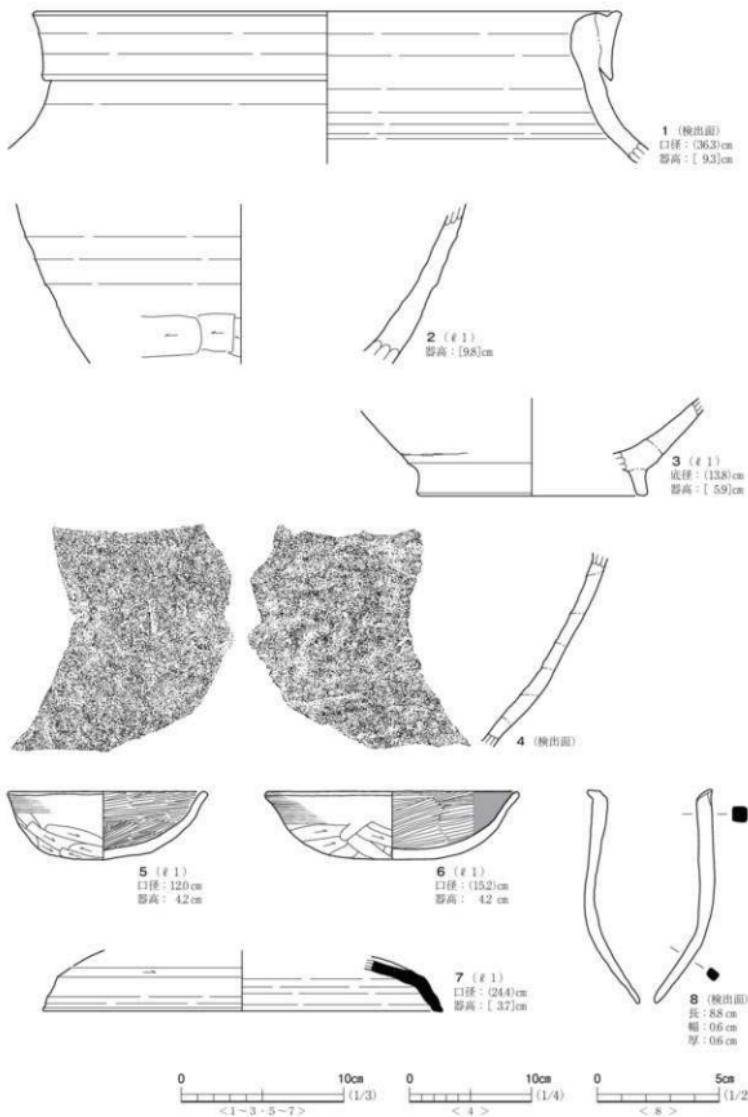


図18 9号住居跡出土遺物

号住居跡と比べると、最も規模が大きい。さらに、4号住居跡と共に入口施設が設けられているのが特徴である。

(吉野)

### 第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は6棟を検出した。各建物跡の時期は、1～4号建物跡が中世、5・6号建物跡は古代頃と推定している。1・2号建物跡は小型で、3号建物跡は大型の建物跡である。

#### 1号建物跡 S B 01

##### 遺構(図19、写真19)

1号建物跡は調査区南部、C 13グリッドL IV d上面で検出した。重複する遺構は38号土坑、小穴で、その新旧関係はP 3・8では小穴が新しいが、それ以外では不明である。

本建物跡は東西2間×南北2間の南北棟で、柱穴8基で構成される。規模は南・北辺が2.75m・3.14m、東・西辺が3.72m・3.65mである。主軸方向はほぼ真北を示す。

芯々による柱間距離は北側柱列のP 5-P 6間が1.15m、P 6-P 7間が1.6m、南側柱列のP 1-P 2間が1.1m、P 2-P 3間が1.65mで、西側柱列のP 3-P 4間が2.1m、P 4-P 5間が1.55m、東側柱列のP 1-P 8間が2.3m、P 7-P 8間が1.35mとなり、梁行・桁行とも柱間距離は一致していない。

柱穴の平面形は楕円形・不整長方形などで、規模は長軸が20～50cm、深さは3～18cmで遺存状態はあまり良くない。底面はP 2・4・5が平坦で、それ以外は皿状に窪んでいる。

柱穴の堆積土の多くは炭化物を含む砂質土で、柱痕跡はみられない。

柱穴からは遺物は出土していない。

##### まとめ

1号建物跡は東西2間×南北2間の南北棟である。本建物跡の周辺にある3号住居跡や3号溝跡などを、関連する遺構と想定している。時期については、3号住居跡・3号溝跡と同じ中世と考えている。

(吉野)

#### 2号建物跡 S B 02

##### 遺構(図19、写真19)

2号建物跡は調査区中央部、C 10・11グリッドL IV d上面で検出した。重複する遺構は61号土坑、小穴で、その新旧関係はP 2では小穴が新しいが、それ以外では不明である。

本建物跡は東西2間×南北2間の南北棟で、柱穴8基で構成される。規模は南・北辺が2.12m・2.48m、東・西辺が2.95m・2.64mである。主軸方向は東側柱列でみるとN 12° Eを示す。

芯々による柱間距離は北側柱列のP 5-P 6間が1.5m、P 6-P 7間が1m、南側柱列のP

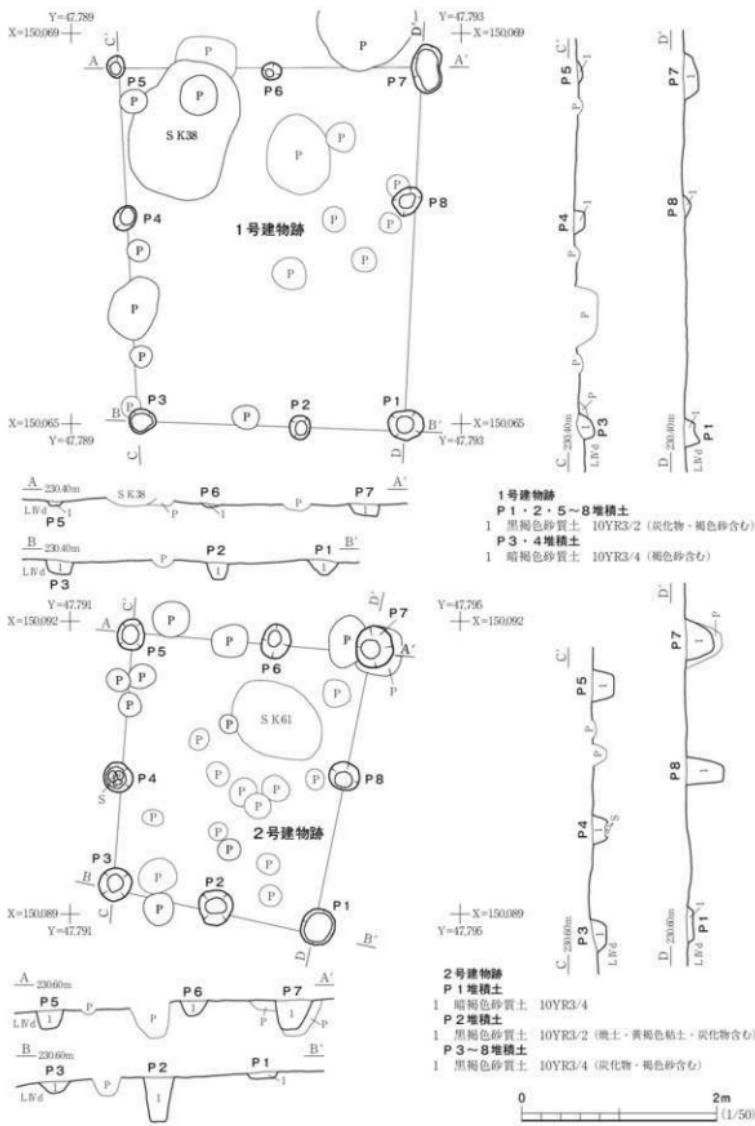


図19 1・2号建物跡

P 1 - P 2 間が1.1m、P 2 - P 3 間が1.1mとなり、西側柱列のP 3 - P 4 間が1.1m、P 4 - P 5 間が1.5m、東側柱列のP 1 - P 8 間が1.6m、P 7 - P 8 間が1.4mとなり、梁行・桁行とも柱間距離は一致していない。

柱穴の平面形は、P 2 の不整長方形以外、楕円形である。規模は長軸が30~42cm、深さは4~45cmである。底面はP 4 では根石が置かれ、P 1 ~ 3・5・8が平坦で、それ以外は皿状に窪んでいる。

柱穴の堆積土の多くは炭化物を含む砂質土で、柱痕跡はみられない。

遺物は、P 7 からロクロ成形のかわらけの細片が出土した。

### まとめ

2号建物跡は東西2間×南北2間の南北棟である。本建物跡の周辺には、3号建物跡があるが主軸方向が異なっていることから、時期差を考えている。時期については、出土遺物から中世と考えている。

(吉野)

## 3号建物跡 S B 03

### 遺構(図20、写真20)

3号建物跡は調査区中央部、B・C 10グリッドL IV d上面で検出した。重複する遺構は4号建物跡、68号土坑、9号溝跡、小穴である。新旧関係は、68号土坑、9号溝跡が古く、小穴はP 2・5・7・8・10と重複するものは、古いものや新しいものがある。それ以外の遺構の新旧関係は、不明である。本建物跡は東西4間×南北1~2間の東西棟である。柱穴は11基で構成されるが、北東隅の柱穴は調査区外にある。なお、梁行となる西側柱列には、P 5と対応する柱穴がない。規模は南辺では8.5m、西辺では4.95mである。主軸方向は北側柱列でみるとN 77°Wを示す。

芯々による柱間距離は、西側柱列のP 1 - P 10間が5m、東側柱列のP 5 - P 6間が2.2mであり、北側柱列のP 1~4は2.2mの等間隔で、南側柱列のP 6~10のうちP 7 - P 8間が2.1mである以外、2.2mの等間隔である。

柱穴の平面形は、P 1・5の楕円形以外、不整長方形である。規模は長軸が65~95cm、深さは10~30cmである。P 5・6が平坦で、それ以外は皿状に窪んでいる。

柱穴の堆積土の多くは炭化物を含む砂質土で、柱痕跡はみられない。

### 遺物(図20)

遺物は土師器16点、古銭1点、土壁1点が出土した。図20-1はP 4から出土した北宋銭で、「皇宋通寶」(1038年初鑄)である。土壁は、焼けた細片でP 5から出土した。

### まとめ

3号建物跡は東西4間×南北1~2間の東西棟で、調査区で確認した建物跡で最も規模が大きく、柱間もほぼ等間隔である。出土遺物からは、地鎮などの行為や土壁の建物をうかがわせる。時期は、出土遺物から中世と考えている。

(吉野)

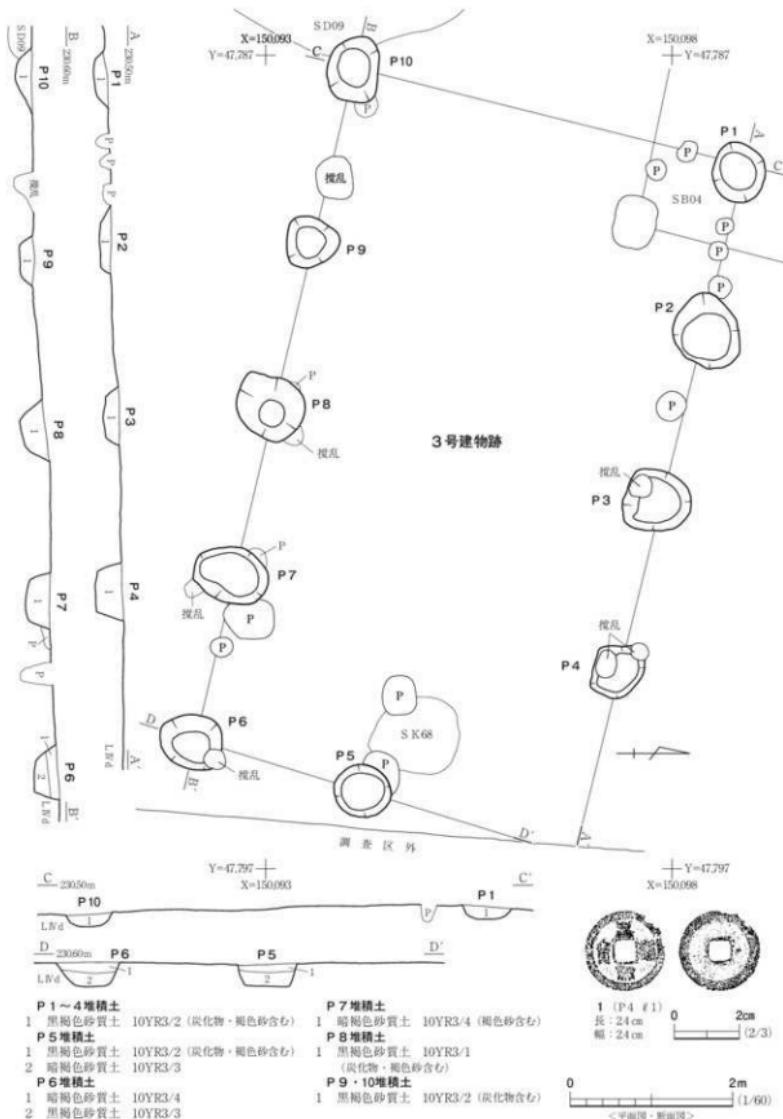


図20 3号建物跡・出土遺物

#### 4号建物跡 S B 04

##### 遺構(図21、写真21)

4号建物跡は調査区中央部、B 9・10グリッドL IV d上面で検出した。重複する遺構は3号建物跡、70・71号土坑、10号溝跡、小穴である。新旧関係は、70号土坑とP 5と重複する小穴が新しく、71号土坑が古い。その他の遺構との新旧関係は、不明である。

本建物跡は東西2間×南北2間の東西棟で、柱穴8基で構成される。主軸方向は北側柱列でみるとN 77°Wを示す。規模は南・北辺が5.24m・5.6m、東・西辺が4.88m・4.95mである。

芯々による柱間距離は西側柱列のP 3～5は2.5mの等間隔で、東側柱列のP 1～P 8間が2.4m、P 7～P 8間が2.5mとなる。北側柱列のP 5～P 6間が2.9m、P 6～P 7間が2.7m、南側柱列のP 1～P 2間が2.9m、P 2～P 3間が2.4mとなる。梁行となる東・西側柱列の柱間距離ほぼ一致するが、桁行となる南・北側柱列の柱間距離は一致しない。

柱穴の平面形は、隅丸方形である。規模は長軸が48～98cm、深さは4～45cmである。底面はP 1～3・5・8が平坦で、それ以外は皿状に窪んでいる。

柱穴の堆積土の多くは炭化物・焼土を含む砂質土で、P 3・4から柱痕跡を確認した。

本建物跡からは、遺物は出土しなかった。

##### まとめ

4号建物跡は東西2間×南北2間の南北棟である。3号建物跡と重複するが主軸方向が一致しているので、あまり時期差をおかずして建て替えられた可能性を考えている。時期については、3号建物跡から中世と考えている。

(吉野)

#### 5号建物跡 S B 05

##### 遺構(図22、写真22)

5号建物跡は調査区の北部、A 3、B 3・4グリッドにわたって位置し、検出面はL IV a上面である。重複する遺構は6号建物跡と小穴であるが、遺構自体の直接の切り合い関係がないため前後関係は不明である。

本建物跡は南北桁行3間×東西梁行1間の南北棟で、6基の柱穴を検出した。なお、西辺南隅はトレンチによって既に掘削されていたが、東辺と対応させると本来は、8基の柱穴で構成されていたものと思われる。主軸方向は建物東辺でN 25°Eを示す。

規模は桁行である東辺が6.5m、梁行である北辺で4.3mである。柱穴で開まれた範囲の面積は約28m<sup>2</sup>である。柱間距離は桁行であるP 1～2間で1.5m、P 3～4間で1.3m、P 4～5間で1.5m、P 5～6間で1.6m、梁行であるP 2～6で3.6mである。

柱穴の平面形は、梢円形もしくは隅丸方形である。直径40～50cm、深さ20cmの規模である。柱痕跡は全ての柱穴で確認された。平面形はいずれも1辺15cmほどの方形であり、角材が用いられ

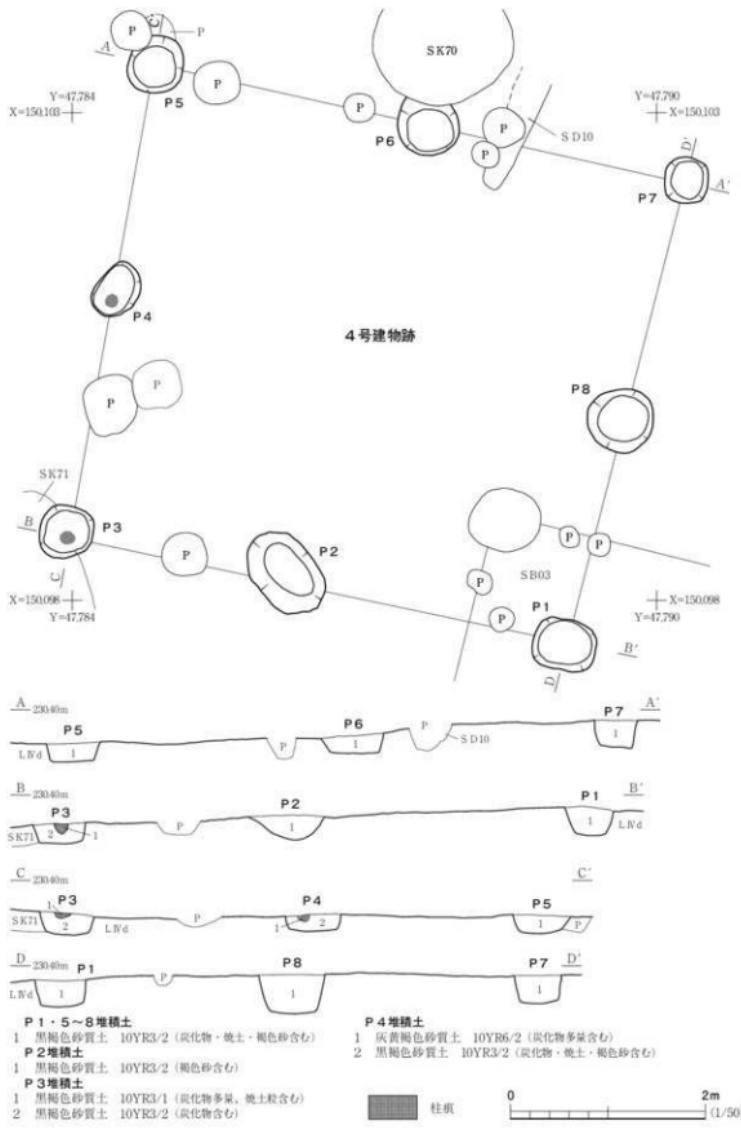


図21 4号建物跡

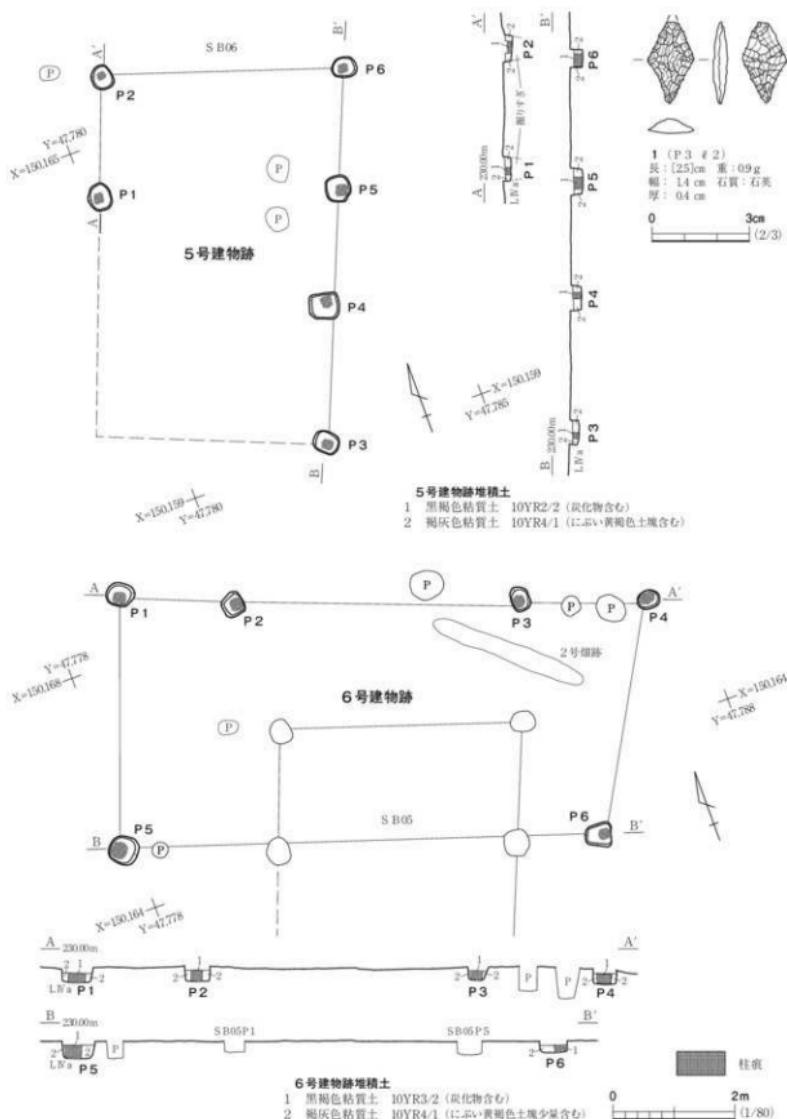


図22 5・6号建物跡、5号建物跡出土遺物

ていたと考えられる。

柱穴の堆積土は2層に分層した。 $\ell$  1は炭化物を含む黒褐色土で、柱痕である。 $\ell$  2はLIVaを含む褐灰色土であり、掘形埋土である。

#### 遺 物(図22)

本遺構からは土師器2点、須恵器1点、石鎌1点が出土している。土師器・須恵器はいずれも細片のため図示できなかった。図22-1は先端部を欠損した有茎石鎌である。

#### ま と め

本遺構は本来8基の柱穴で構成される、桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡である。出土遺物が乏しく時期を決定できる根拠はほとんどない。しかし、周辺に存在する古墳時代の遺構の堆積土にみられるHr-FP(榛名-伊香保テフラ)が含まれないことや、周辺から中世の遺物が一切出土していないことから、古代墳の時期が想定される。

(神林)

### 6号建物跡 S B 06

#### 遺 構(図22、写真22)

6号建物跡は調査区北部のA・B3グリッドに位置し、検出面はLIVa上面である。重複する遺構は5号建物跡、2号烟跡、小穴で、新旧関係は2号烟跡が古く、その他の遺構は不明である。

本建物跡は6基の柱穴で構成され、桁行1・3間×梁行1間の東西棟である。規模は桁行である北辺で9.1m、南辺で8.3m、梁行である西辺で3.7m、東辺で3.5mとなっている。柱穴で囲まれた範囲の面積は約33m<sup>2</sup>である。柱間距離は桁行である北辺のP1-2間で1.9m、P2-3間で2.8m、P3-4間で1.8m、梁行であるP1-5間で3.7m、P4-6間で3.5mである。

柱穴の平面形は楕円形および隅丸方形である。直径30~50cm、深さ20~30cmの規模である。柱痕の平面形はP1・2・5が方形、P3・4・6が楕円形となっている。

柱穴の堆積土は2層に分層した。 $\ell$  1は炭化物を含む黒褐色土で柱痕である。 $\ell$  2はLIVaを含む褐灰色土であり、掘形埋土である。

遺物は柱穴内や周辺も含めて出土しなかった。

#### ま と め

本遺構は6基の柱穴で構成される桁行1・3間×梁行1軒の掘立柱建物跡である。明確な時期を示す根拠に乏しいが、重複する5号建物跡とほぼ同様な堆積土が認められることから、古代に建てられた建物跡と考えている。

(神林)

## 第4節 土 坑

土坑は104基を確認し、調査区中央部から南部にかけて多く分布していた。調査に際しては、1~112号土坑まで遺構番号を付けたが、28・29・52・53・57~60号土坑は欠番とした。

以下、出土遺物を掲載した土坑、特徴的な土坑について記述し、それ以外の土坑については表3～5にその概略をまとめた。

#### 1号土坑 SK 01 (図23・41、写真23・51)

1号土坑は調査区南端部、C 17・18グリッドL IV b上面で検出した。本土坑の平面形は南北に長い長楕円形で、規模は南北2m、東西1m、深さ0.57mである。底面は水平につくられており、周壁は底面から垂直に立ち上がる。

堆積土は4層に分層した。 $\ell$  1は土坑の上面を覆う層である。 $\ell$  2はL IV b由来とみられ、 $\ell$  4と近似する。 $\ell$  3は炭化物層で、土坑全体に広がり南側に比べ北側は層厚が薄い。 $\ell$  4は土坑底面を覆う層である。 $\ell$  1・2・4は土坑の構築排土を埋め戻した層で、 $\ell$  3は人為的に敷いた炭化物層である。

遺物は土師器4点、かわらけ2点、陶器1点、鉄製品1点が出土した。図41-1は鋳鉄製の獸足付手取釜で、三足の付いた釜に、注口と持ち手である鉢が付いている。最大径約18.4cm、脚端部から器高17cm、口径は約9.2cmとなっている。釜の上面に付く鉢付は取り外しのきかない常張りである。ここに取り付く鉢は遺存していなかったが、釜内部に細かく碎けた棒状の鉄が落ち込んでいたことから、これらが鉢であったものと考えられる。注口は直径12cmで、胴部上半側面に取り付けられている。肩部は張り、強く屈曲して胴部にいたる。底部中央には一文字の湯飲み口が認められる(写真51)。3足はいずれも胴下部側面に取り付く。図41-2は陶器の常滑焼で、壺もしくは壺の胴部上半部である。

1号土坑は鉄器を埋納した施設で、墓坑の可能性も考えられる。その時期は出土遺物から中世である。

(神林)

#### 2号土坑 SK 02 (図24・41、写真23・50)

2号土坑は、調査区南部のC 17グリッドL IV b上面で検出した。平面形は不整方形で、規模は長軸が2.14m、短軸が1.4m、深さは0.59mである。壁は二段構築され、底面は凹凸がみられる。堆積土は4層に区分した。各層の土質や含有物から、人為堆積を考えている。

遺物は土師器1点、陶器2点、古銭1点、鉄製品5点、土壁4点が出土した。図41-3は北宋錢の「元豐通寶」(初鑄1078年)である。

2号土坑は廐棄物などを埋めた穴で、時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

#### 6号土坑 SK 06 (図24・41、写真23・50)

6号土坑は、調査区南部のC 15グリッドL IV c上面で検出した。重複する遺構は小穴で、古いものや新しいものがある。平面形は楕円形で、規模は長軸が1.3m、短軸が0.98m、深さは0.22mである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で人為堆積を考えている。

表3 土坑一覧(1)

遺構番号	遺構名	位置	竪(タリッフ)	平面圖形	長軸方向	地盤(㎝)		重複關係 古→新	地盤状況	底土	遺物	遺物番号	遺物	参考
						平	深さ							
1	23	C17	18	長角形	N16° E	200×100	57		人为地盤	土陶器、陶器、古瓦、灰陶器、瓦砾	41	中量	23	50
2	24	C17	19	隅丸足方形	N85° E	214×140	59		人为地盤	土陶器、陶器、古瓦、灰陶器、瓦砾	41	中量	23	50
3	24	C17	20	方彌足方形	N88° W	219×134	45		自然地盤		不明	23	50	
4	24	C17	21	不整方形	N20° E	130×94	18	S K64→S K65	自然地盤		不明	23	50	
5	24	B16	22	不整方形	N77° W	121×101	35	S K65→S K66	人为地盤		不明	23	50	
6	24	C15	23	椭円形	N88° E	130×98	22	S K66→S K67→S K68	人为地盤	磁器、古瓦	41	中量	23	50
7	25	C17	18-	椭円形	N40° E	166×137	53		人为地盤、自然地盤	土陶器、陶器、瓦砾	41	中量	23	23
8	25	C16	17	隅丸足方形	N50° E	320×230	50	小穴→S K68	人为地盤、自然地盤	かわらけ、石製品	42	中量	23	23
9	25	C16	17	隅丸足方形	N73° E	254×189	13	小穴→S K69→S K70	人为地盤、自然地盤	瓦製品	42	中量	23	23
10	25	B16	24	椭円形	N22° W	95×80	20		自然地盤		不明	24	24	
11	26	B17	25	隅丸足方形	N20° W	120×95	44		人为地盤	自然地盤	かわらけ	不明	24	
12	26	C16	26	隅丸足方形	N21° E	130×122	56	S K12→S K13	人为地盤	自然地盤	不明	24	24	
13	26	C14	27	隅丸足方形	N28° W	152×132	12	小穴→S K13	自然地盤	磁器	42	中量	24	50
14	26	C14	28	椭円形	N3° W	140×118	29	S K12→S K14	人为地盤	土陶器、陶器、灰陶器、灰製品	42	中量	24	24
15	27	C17	29	不整方形	N80° E	140×126	63		人为地盤	土陶器、陶器、灰陶器	42	中量	24	24
16	27	C16	30	D16 不整方形	-	345×132	60	S K16→S K17	人为地盤	半分壇臺区外	24	24	24	
17	27	D14	31	椭円形	-	132×50	36		自然地盤		不明	半分壇臺区外	24	
18	28	B13	34	円形	N30° E	156×156	96	30	自然地盤	自然地盤	不明	24	24	
19	28	B13	35	椭円形	N80° E	137×87	32		自然地盤	陶器、かわらけ、灰製品	42	中量	25	
20	28	B13	36	不整方形	N38° E	158×140	23	S K49→S K21	人为地盤	かわらけ	不明	25		
21	28	B13	37	円形	N67° W	131	30	S K50→S K21	自然地盤	自然地盤	不明	25		
22	27	C18	38	椭円形	N53° W	140×99	37	S K48→S K22	人为地盤	自然地盤	不明	25		
23	28	C12	39	椭円形	N84° W	211×122	44	S D63→S K24	人为地盤	瓦製品	不明	25		
24	27	C12	40	椭円形	N17° W	106×93	24	S D63→S K24	人为地盤	陶器、かわらけ、土陶器、古瓦、灰陶器	42	中量	25	
25	29	C12	41	不整方形	N65° W	128×93	14	S D63→S K25	人为地盤	古瓦	42	中量	25	
26	29	C12	42	隅丸足方形	N70° W	157×110	41	S K64→S K26	人为地盤	土陶器、かわらけ、古瓦	42	中量	26	
27	30	C12	43	隅丸足方形	N15° W	124×108	33	S K64→S D63→S K27	人为地盤	陶器、かわらけ、古瓦	42	中量	26	
31	30	C13	44	椭円形	N37° E	111×88	35		人为地盤	陶器	不明	26		
32	30	C13	45	隅丸足方形	N43° W	162×103	36		人为地盤	自然地盤	不明	26		
33	31	B14	46	不整方形	N30° W	155×130	26		自然地盤	土陶器、陶器、土甕	42	中量	26	
34	31	B14	47	椭円形	N66° E	373×285	15	A K6→S K33→S K34	自然地盤	陶器	42	中量	26	
35	31	B14	48	不整方形	N86° W	172×165	13	S K34→S K35	自然地盤	古甕	26	26		
36	31	C13	49	椭円形	N16° W	269×157	27		人为地盤	土陶器、陶器、かわらけ、土甕	不明	26		
37	31	B14	50	隅丸足方形	N50° W	94×92	19	A K6→S K37→S K35	自然地盤		不明	26		

表4 土坑一覧(2)

遺構 番号	遺構 名	位 置 (ダーリッフ)	平面形	長軸方向	規 模(cm)	重複關係 古→新	堆積状況	出土 遺 物		遺物 堆積番号	写真図版番号
								平 面	深さ	出 土	遺 物
38	30	B13, C13	隅丸方形	N33°E	144×102	42	5.65→SK38→1.65	人為堆積	土壙器、かわらけ	中世	36
39	32	C13	楕円形	N85°E	135×92	39	5.65→SK39→1.65	人為堆積	陶器、かわらけ、古鏡	中世	27
40	28	C13-14	楕円形	N42°W	142×110	10	5.65→SK39→1.65	人為堆積	不明	不明	27
41	32	B13	隅丸方形	N63°W	97×75	15	自然堆積	自然堆積	土壙器	中世	27
42	32	C11	楕円形	N35°W	103×83	20	自然堆積	人為堆積	土壙器	中世	27
43	32	B12	隅丸方形	N55°E	87×80	14	SD09→SK33	人為堆積	土壙器	中世	27
44	32	C11	楕円形	N45°W	120×98	14	5.65→SK44	自然堆積	土壙器	中世	27
45	32	C11	隅丸方形	N37°W	94×80	18	5.65→SK45	自然堆積	土壙器	中世	27
46	32	C11	円形	N85°E	88	32	5.65→小穴	自然堆積	陶器	中世	27
47	32	B12	楕円形	N45°W	[64]×69	20	SD07→SD03	人為堆積	土壙器	中世	27
48	32	C13	楕円形	N85°E	111×88	25	SD02→SK18	人為堆積	土壙器	中世	27
49	33	C11	隅丸方形	N75°E	178×109	12	5.65→SK49	自然堆積	陶器、土壙器、かわらけ	中世	27
50	33	B11-12	円形	-	120×117	35	人為堆積	土壙器、かわらけ	半分圓柱区外	中世	27
51	33	B11, C11	不整方形	N45°E	199×17	19	SK51→小穴	人為堆積	土壙器、かわらけ	中世	28
54	33	C10-11	円形	N50°W	93×77	25	5.65→SK54	人為堆積	陶器	中世	50
55	33	C10	円形	N61°E	77	自然堆積	人為堆積	陶器	中世	28	
56	33	C10-11	楕円形	N37°W	114×84	22	5.65→SK56	人為堆積	土壙器	中世	28
61	33	C10	楕円形	N50°W	102×74	36	5.65→SK61	自然堆積	土壙器、鍛錬器	中世	28
62	33	B10, C10	円形	N37°E	120×62	12	5.65→SK62	自然堆積	土壙器	中世	28
63	34	C11	楕円形	N80°W	68×49	30	5.65→SK63	人為堆積	土壙器	中世	28
64	34	B12, C12	不整方形	N37°E	226×160	12	5.65→SK65-27	人為堆積	土壙器、陶器	中世	28
65	34	C11	不整方形	N40°E	92×45	25	人為堆積	土壙器	中世	28	
66	34	C9	不整方形	N15°E	175×141	11	5.65→SK66	自然堆積	土壙器	中世	28
67	34	B10	楕円形	N20°E	279×14	32	5.65→SK67	自然堆積	土壙器	中世	28
68	34	C10	不整方形	N7°W	114×93	29	人為堆積	土壙器	中世	28	
69	35	B10-11	不整方形	N18°E	330×134	25	SD09→SE08	人為堆積	土壙器	中世	29
70	35	B9	円形	N84°W	145	44	SD09→SK70→1.65	人為堆積	土壙器	中世	29
71	35	B10	楕円形	N10°W	175×83	22	SK71→SD04→E08	人為堆積	土壙器、陶器、かわらけ、土窯	中世	29
72	35	C9-10	隅丸長方形	N11°E	306×133	35	5.65→SK73→SK72	人為堆積	土壙器、陶器、かわらけ、土窯	中世	29
73	35	C9-10	不整方形	N77°E	[288]×155	43	5.65→SK73→SK78	人為堆積	土壙器、陶器、かわらけ、土窯	中世	29
74	36	B9	楕円形	N88°W	109×85	21	5.65→SK74	自然堆積	土壙器	中世	29
75	36	C7	不整方形	N31°E	[227]×104	12	5.65→SK75	自然堆積	土壙器	中世	29
76	34	C8	円形	N30°E	84	29	人為堆積	土壙器	不明	29	
77	36	B15	円形	N80°E	88	22	5.65→SK77	人為堆積	土壙器	中世	29
78	36	B9	楕円形	N67°W	99×79	10	SD04→SK78	自然堆積	土壙器	不明	29
79	36	B8	楕円形	N79°W	145×108	13	SK79→SD11	人為堆積	土壙器、かわらけ	中世	29
80	36	A8, B8	楕円形	-	[56]×80	8	自然堆積	半分圓柱区外	不明	29	

表5 土坑一覧(3)

通 用 番 号	位 置 (グリッド)	平面形	長軸方向	規 模(cm)	重複開 底 占 一 断	施 設 状 況	出 土 遺 物	通 物 持 因 子 番 号	通 物 持 因 子 番 号	備 考	写真図版番 号	遺 物
81	36 B8	楕円形	N75' W	83×43	12	自然地 形	陶製品	不明	不明	中世	30	
82	37 A7, B7	椭丸長方形	N70' W	215×151	28	S D17→SK82	人為地 形	43	中世	古墳	30	
83	A4・5	椭丸長方形	N26' W	228×133	52	人為地 形	土陶器	不明	不明	中世	30	
84	36 B7	不整方形	N21' W	84×68	26	自然地 形	陶製品	不明	不明	半分離区外	30	
85	37 A7, B7	椭円形	—	98×[52]	46	自然地 形	陶製品	不明	不明	中世	30	
86	37 B15	円形	—	165×[36]	47	人為地 形	陶製品	不明	不明	半分離区外	30	
87	37 D14	円形	N80' W	145×123	31	人為地 形	陶製品	不明	不明	中世	30	
88	37 D15	椭円形	N59' W	176×146	22	人為地 形	陶製品	不明	不明	半分離区外	30	
89	38 E15	不整方形	—	156×[30]	45	人為地 形	陶製品	不明	不明	中世	30	
90	38 D15	椭円形	N60' E	139×16	21	人為地 形	陶製品	不明	不明	中世	31	
91	38 D14	椭円形	N80' W	149×111	29	自然地 形	陶製品	不明	不明	中世	31	
92	38 C14・15	椭円形	—	175×[62]	77	人為地 形	陶製品	不明	不明	半分離区外	31	
93	38 C14・15	円形	N86' E	105	32	小穴→S K93	自然地 形	土陶器	不明	中世	31	
94	38 D14・15	円形	N50' E	192	44	人為地 形	土陶器、かわらけ	不明	不明	中世	31	
95	38 C14	椭円形	N63' E	103	25	小穴→S K95	人為地 形	陶器	不明	中世	31	
96	39 C15	椭円形	N72' W	177×152	76	小穴→S K96	人為地 形	土陶器	不明	中世	31	
97	39 C15	不整形	N50' W	162×123	38	SK95→SK97	自然地 形	土陶器	不明	中世	31	
98	39 B14	円形	N71' W	107	22	SK95→SK98	人為地 形	土陶器、陶製品	不明	中世	31	
99	39 C15	椭円形	N32' W	114×86	17	小穴→S K99	自然地 形	土陶器	不明	中世	31	
100	39 C14・15	不整長方形	N80' W	168×134	31	SK103→SK100	人為地 形	土陶器	不明	中世	31	
101	40 C14・15	不整方形	N80' W	191×145	23	SK101→SK97→小穴	人為地 形	土陶器、陶製品	不明	中世	31	
102	39 —	円形	N35' E	114	12	小穴→S K102	人為地 形	陶器	不明	中世	31	
103	39 B14・15	椭円形	N11' W	126×98	15	SK94→105→S K103	人為地 形	陶器	不明	中世	31	
104	39 C15	椭円形	N42' W	84×73	8	SK104→SK103	人為地 形	陶器	不明	半分離区外	31	
105	40 B14・15	不整形	N77' E	122×61	14	SK98→103→SK105	人為地 形	土陶器	不明	中世	31	
106	40 B15	円形	—	81	60	自然地 形	陶器	不明	不明	半分離区外	31	
107	40 A15	円形	N88' E	108×96	11	人為地 形	土陶器	不明	不明	古墳	31	
108	40 A14	円形	—	108	28	人為地 形	土陶器	不明	不明	中世	31	
109	40 B5, C5	椭円形	N73' W	146×[90]	20	人為地 形	土陶器	不明	不明	中世	31	
110	40 B6	椭丸長方形	—	115	27	SK109→SD14	人為地 形	陶製品	不明	中世	31	
111	40 B18	椭丸長方形	—	143×[50]	55	S 109→SK111	人為地 形	陶製品	不明	中世	31	
112	40 C13	椭円形	N67' W	94×73	16	人為地 形	陶製品	不明	不明	中世	31	

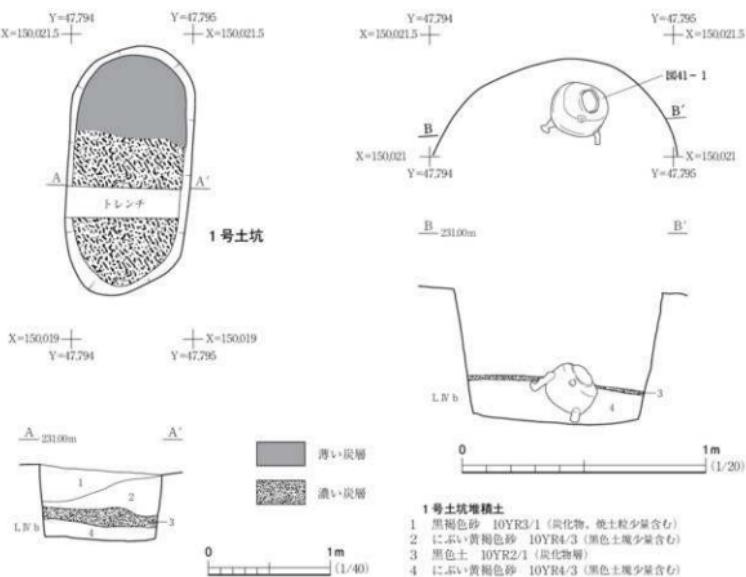


図23 1号土坑

遺物は磁器1点、古銭1点が出土した。図41-4は北宋銭の「紹聖元寶」(初鑄1094年)で、図41-5は白磁の口禿碗である。

6号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

#### 7号土坑 SK 07 (図25・41、写真23)

7号土坑は、調査区南西端のC 18グリッドを中心としたL IV b上面で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸が1.66m、短軸が1.37m、深さは0.53mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面は皿状に窪む。堆積土は3層に区分した。 $\ell$  1は土質や含有物から人為堆積で、 $\ell$  2・3は自然堆積である。

遺物は土器1点、陶器3点、かわらけ1点が出土した。図41-6は陶器で、古瀬戸の緑釉小皿である。図41-7はかわらけで、ロクロ成形によるものである。

7号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

#### 8号土坑 SK 08 (図25・42、写真23)

8号土坑は、調査区南部C 16・17グリッドに位置し、小穴と重複し、本遺構が新しい。平面形は東西方向に長い長方形で、主軸はN 50°Eを示す。

## 第4節 土坑

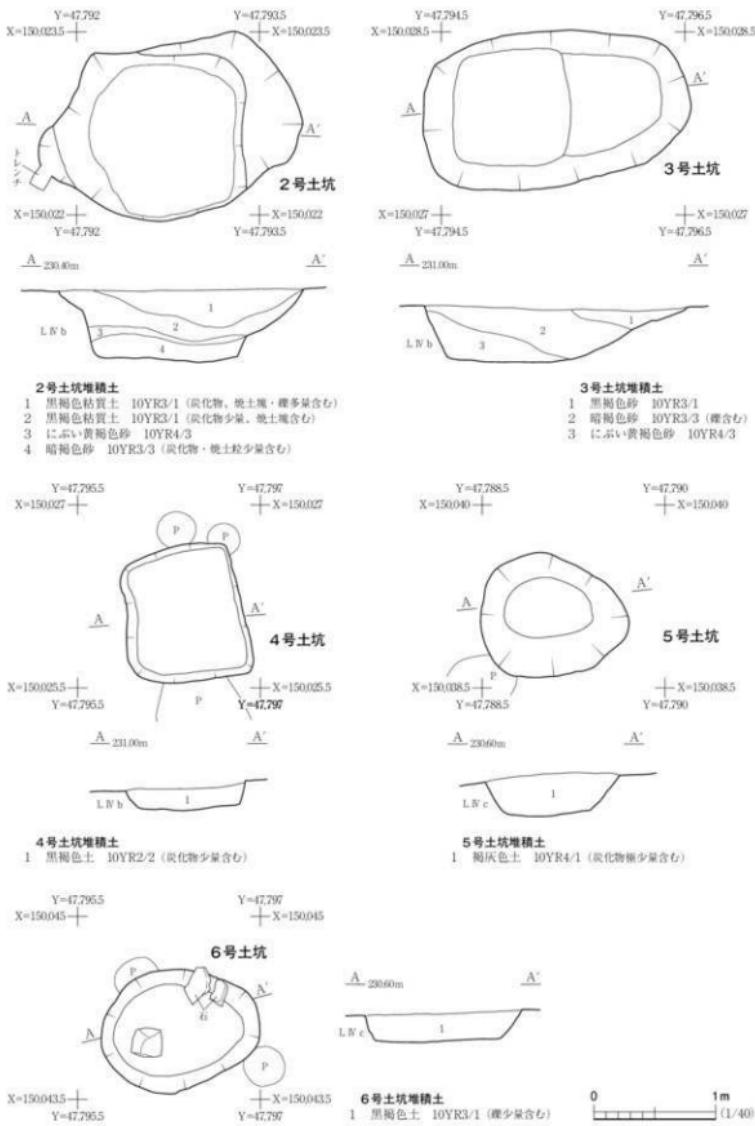


図24 2~6号土坑

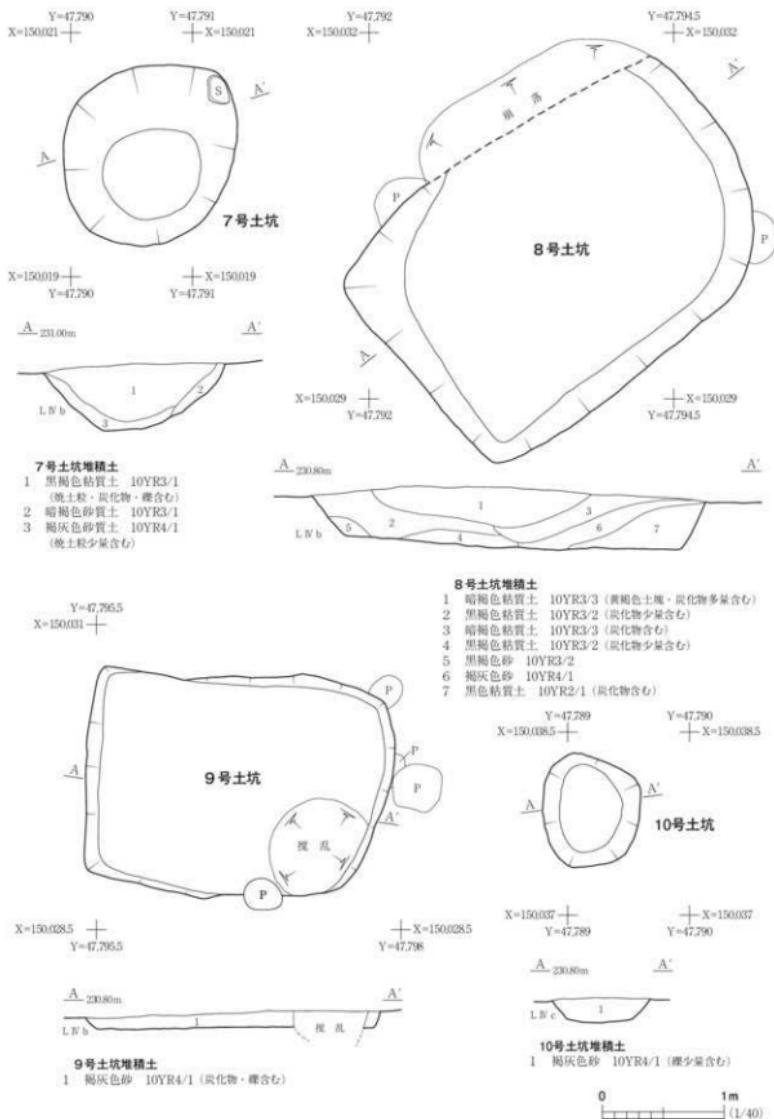


図25 7~10号土坑

規模は長軸3.2m、短軸2.3m、深さ最大0.5mである。底面は東から西に向かって緩く下るが、ほぼ平坦である。壁は底面から外形気味に立ちあがる。なお底面には細かな炭化物が散っていた。

堆積土は7層に分層した。 $\ell$  1は遺構上面中央部に堆積する暗褐色粘質土で、黄褐色粘質土塊と炭が非常に多く含まれている。黄褐色粘質土塊は遺構周辺のL IV bには見られないことから、人為的な埋土の可能性が高い。 $\ell$  2・4・5は遺構西側に堆積する黒褐色土で、 $\ell$  2・4は自然堆積土、 $\ell$  5は壁の崩落土とみられる。 $\ell$  3・6・7は遺構東側に堆積しており、自然堆積土とみられる。

遺物はかわらけ1点、石製品1点である。図42-1は砥石で、上端部は欠損している。全面にわたって使用されている。

本遺構は大型の土坑として調査したが、いわゆる「方形堅穴建物跡」と呼称される中世の堅穴建物跡の可能性が高い遺構である。

(神林)

#### 12号土坑 SK 12 (図26、写真24)

12号土坑は調査区南部のB・C 16グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が新しいと考えている。

平面形は、西側が調査区外に延びているが、東西に長い長方形であると考えられる。規模は東西で検出された範囲が3.5m、南北3.32m、検出面からの深さは0.5mほどである。底面は平坦となつておらず、壁は底面から急角度で立ち上がる。

堆積土は6層に分層した。 $\ell$  1は遺構上面を覆う暗褐色砂で焼土塊や炭化物が含まれている。 $\ell$  2は西側から流入するように堆積する暗褐色砂である。本遺構が掘り込まれるL IV c由来の砂が部分的に集積した状態で含まれている。 $\ell$  3は黒褐色砂で黄褐色または黒褐色の粘土塊が多量に含まれていた。 $\ell$  4は東側の床面を覆うにぶい黄褐色粘土である。 $\ell$  5は東壁に接して三角堆積する黄褐色粘土である。 $\ell$  6は西側の床面を覆うと推定される黒褐色砂で、黄褐色粘土塊が含まれている。各層には炭化物・焼土・粘土塊などが含まれていることから、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物はかわらけが2点出土した。

本遺構は大型の土坑として調査したが、いわゆる「方形堅穴建物跡」と呼称される中世の堅穴建物跡の可能性が高い遺構である。

(神林)

#### 14号土坑 SK 14 (図26・42、写真24・50)

14号土坑は、調査区南部のC 14グリッド L IV c 上面で検出した。小穴と重複し、本土坑が新しい。平面形は橢円形で、規模は長軸が1.4m、短軸が1.18m、深さは0.29mである。壁は外傾し、底面は凹凸が著しい。堆積土は1層で、自然堆積土であろう。

遺物は磁器1点が出土した。図42-2は白磁の皿で、高台には施釉されていない。

14号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

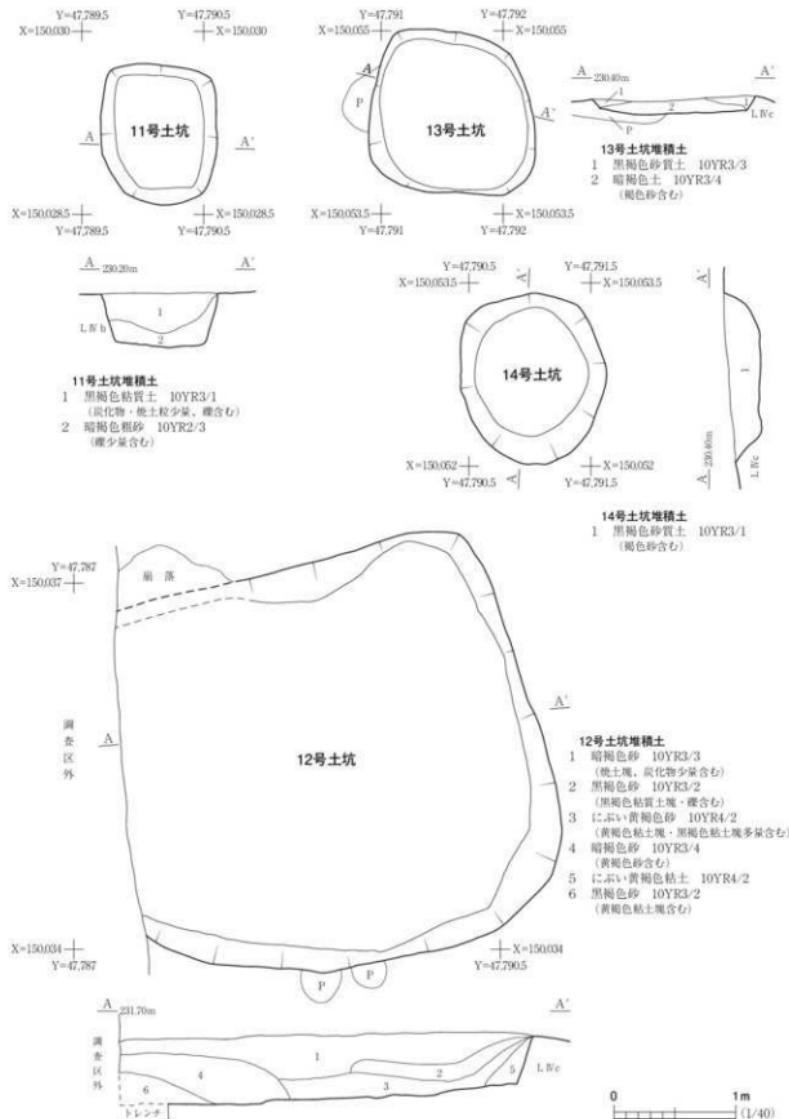


図26 11~14号土坑

## 15号土坑 S K 15 (図27・42、写真24)

15号土坑は、調査区南部のC 17グリッドL IV b上面で検出した。平面形は不整方形で、規模は長軸が1.4m、短軸が1.26m、深さは0.63mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に区分し、いずれにも炭化物が含まれていることから、人為堆積を考えている。

遺物は土師器1点、陶器1点、磁器1点、鉄製品2点が出土した。図42-3は陶器の渥美焼で、甕もしくは壺で、図42-4は白磁の皿である。

15号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。 (吉野)

## 16号土坑 S K 16 (図27・42、写真24)

16号土坑は、調査区南部のD 16グリッドL IV b上面で検出した。小穴と重複し、本土坑が新しい。平面形は東半分が調査区外にあり、現状では不整方形である。規模は長軸が3.45m、短軸が現状で1.32m、深さは0.6mである。壁は緩やかに外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分し、礫や焼土塊などが含まれていることから、人為堆積を考えている。

遺物は土師器1点、陶器2点、鉄製品1点が出土した。図42-5・6は陶器の常滑焼で、甕もしくは壺で、6の内面には炭化物が付着している。

16号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。 (吉野)

## 20号土坑 S K 20 (図28・42、写真25)

20号土坑は、調査区南部のB 13・14グリッドL IV c上面で検出した。平面形は西壁が調査区外にあるため明確ではないが、現状では不整方形である。規模は長軸が現状で1.58m、短軸が1.4m、深さは0.23mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分し、いずれも褐色砂が含まれていることから、自然堆積と考えている。

遺物は陶器2点、かわらけ1点、鉄製品1点が出土した。図42-7は陶器の常滑焼で、山茶椀系のこね鉢である。

20号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。 (吉野)

## 24号土坑 S K 24 (図27・42、写真25・50)

24号土坑は、調査区南部のC 12グリッドL IV c上面で検出した。3号溝跡と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.06m、短軸が0.93m、深さは0.24mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分し、ℓ 1には炭化物が多量に含まれていることから、人為堆積を考えている。

遺物は陶器1点、かわらけ3点、土製品1点、古銭2点、鉄製品1点が出土した。図42-8は陶器の常滑焼のこね鉢で、図42-9・10は北宋銭で、9が「皇宋通寶」(初鑄1038年)、10が「大觀

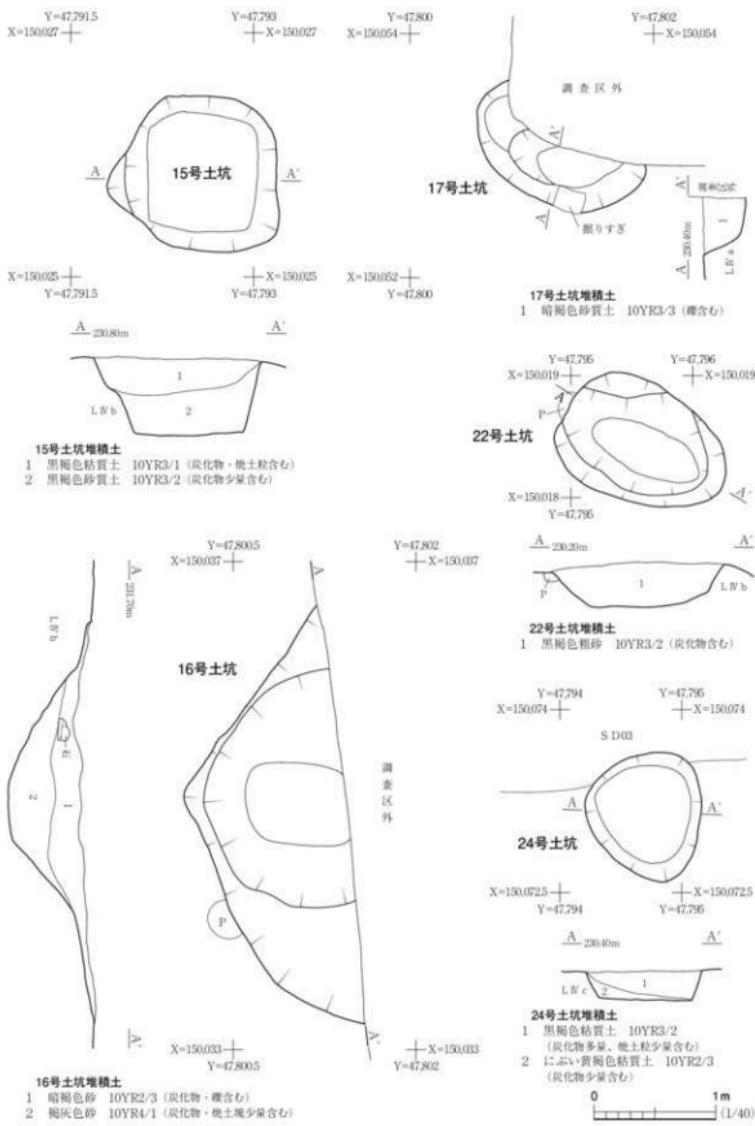


図27 15~17・22・24号土坑